
死亡フラグ回避の華麗な方法～物語の裏で蠢く皇女様血涙編～

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死亡フラグ回避の華麗な方法〈物語の裏で蠢く皇女様血涙編〉

【Nコード】

N7136Y

【作者名】

ワシワシ

【あらすじ】

異世界に転生した日本人、そこは脳筋魔族の蠢く魔界だった！
強さこそ全て！ 筋肉は正義！ 戦いこそが我が覇道！ 人間気に
食わぬ↓戦争だぁ！ の脳筋な魔族の皆さん、勘弁してください。
戦争回避のために今日も奔走、人界三界から陳情山積み、そろそろ
鬱になる頃です。常識とは何ですか？ あすも私は生きていますか
？ 死亡フラグパラメータの上昇を防ぎ、今日も元日本人の皇女は
死んだ魚の目で生きて行きます。栄養ドリンクのビンがしゃれにな
らないほど床に転がって……あれ？ 涙で前が見えない……

そろそろ血涙が止まらない

訃報です。

皇女リュの脳裏をそんな言葉が掠めた。

あるいは、『会議は踊る』とも。

本来、『されど、進まず』と続くべきであるが、進み過ぎて、もはやもう誰にも止められぬ。

ここは魔界である。問答無用に魔界なので、そういうものごと納得していただきたい。

魔界の魔王城の一角。

円卓に着くのは、魔族の内、皇族級以外に、各氏族の長が十五名である。

蛇龍の長、九頭竜公デボラ。

不死の長、吸血公メルキオラ。

巨人族、巨人公ヨーガ。

天魔の長、鳳凰公カクラ。

水棲族の長、魔魚カン。

蟲族、蝶公ウリト。

悪魔族、美麗公アスタロト。

ジン族、大食公シェヘラザード。

氷魔族、氷雪公リスタロット。

犬狼族、狼牙公シヴァ。

猫魔族、虎公オンサ。

鬼族、剣鬼公パール。

花樹族、花怪公ヒョウゼン。

邪妖精族、貪欲公アナザー。

造魔族、鎧公グイン。

魔族の有象無象を挙げていけばきりがなが、その中でも特に力を持つ一五公が一同勢ぞろいし、喧々諤々何を話しているかと言え

ば、実にくだらなくも血の気の下がる内容である。

「最近、人間どもが魔界にちょっかいかけてきて、うっとうしいのう」

発言者は見当たらない。

いや、円卓の上に用意された小さな座布団の上にちんまり座っている邪妖精アナザーが発言したのだった。

切りそろえた黒髪に、黒い羽の彼女が邪悪に言えば、あっさりと九頭竜公デボラが扇を手のひらに打ちつける。

天を突けとばかりに鋭い三角錐の緑の髪がざわざわと動いて——お察しのとおり無数の蛇である。

「ぶっ殺してしまえばよろしいのですわ！」

よろしくない、ぜんぜんよろしくない、と成り行きを見守っていたリュは心臓がきりきりと痛んだ。

その肘の上からは黒く、次第にワインレッドへと変わるパゴダスリーブの開いた袖口から覗く手元では、便利屋としていつも同席を強要されるままに、自主的な議事録作成している。

きっと誰も目を通さない議事録ではあろうが、会議と名がつく以上は、と発言を記録する。

「あーあれですな。魔界の資源を狙っておるのでしょうな。ま、ちまちまつぶしていくのも面倒ですし、ここは一気に大侵攻といきますかな」

「ぱーっと景気づけに、いいねえ！」

前者は髭をしごきながら一見渋いロマンスグレーに見える吸血公メルキオラ、後者は天魔の長、頭の中身が常夏の鳳凰公カクラが陽

気に言い放った言葉である。

ぱーっと景気よくやられては、誠にたまらない。

(どう、穏便におさめよう)

リュはいっそもう何もかもどうにでもなあれ、という気分ではあったが、そういうわけにもいかないことは重々承知していた。

こいつら、その場のノリで、誠に大戦争を始めかねないのだ。

おまけに、世界警察を気取る白竜族どもから、嫌な書簡が来ていて、これ以上魔族が破壊行為を繰り返すようなら戦争も辞さぬというような内容が婉曲どころかストレートに書き連ねてあった。

(私にどうせよと……)

所詮リュは、皇族といえども、継承権なんか下から数えた方が早いよ！ 生母も淫魔族ゆえにたいした戦闘力もないよ！ という別の意味で懦弱サラブレッドな皇女である。

しかも、彼女は生前『日本人』であった。

気がつくと、彼女はこのなんちゃってファンタジー世界に転生しており、しかも魔族の皇女などという立場にあった。

幼児のころに、漠然と以前の人格と現在の人格が融合したのではあるが、その感性は、ぶっちぎりで生前寄りだ。

戦闘が三度の飯より大好きな魔族において、ラブ&ピースで頼みますなどという思考回路で生きているリュは、真の意味で異物なのであった。

つまり、この脳筋どもに色々ついていけねえ。というのが、リュの偽らざる本音であり、ついていけなくとも、その無茶ぶりは阻止しないと大変なことになるというのだけは理解できるために、二四時間馬車馬のように働けますかを実践してしまっている。

いわゆる、尻拭いというやつだ。

(うう、戦争だけは、戦争だけはご勘弁を)

胃の辺りを押さえつつ、リュはころあいを見計らってゆっくりと口を開いた――

会議終了後、マーメイドドレスの裾をさっさとさばいて執務室に戻ったリュは、どさり、と椅子に腰を下ろした。長い黒髪がさらさらと肩に流れて行く。

胸元は仕様上開いているが、喉元の襟をくつろげたくなった。

そのまま天井を見上げ、目の奥から走るきりきりとアイスピックで穴をあけられているような痛みに耐えかねて眉根を揉んだ。ゴシツクにゴテゴテとした巨大なナース帽もどきの帽子がずり落ちそう
だ。

(なんとか、丸く？　まる……くはないがなんとか収まった……)

大戦争だけは回避した。

誰も褒めてはくれぬが、自分だけは自分を褒めてもいいよ！　と

リュは自画自賛して余計に頭痛が酷くなった。

空しいばかりである。

ともかく、しばらくはこの手で行こう、とリュは以前に決めたとおりに事を収めた。

すなわち、『弱い人間を掃討したとて、何の手柄にもならぬ。むしろそれを誇ってる奴いたら、恥ずかしくね？』作戦である。

魔族は個々の武勇に何よりも重きを置く。

弱いものいじめをして、勝てて当然の相手に踏ん反りかえっていれば、むしろ失笑される。

そこをぐりぐりと言葉柔らかかに抉ってやった。

しかし、弱い淫魔族のリユが発言する際、魔族のトップたちから向けられる視線のプレッシャーときたら、新しいプレイの境地に目覚めかねないほどのあれこれそれであった。

（もうやだ……）

リユは半ば心折れつつも、頭痛をこらえて身を起こした。

マホガニー材に良く似た材質の机の上に山積みとなっている書類をじっと見つめ、見ても減らぬのはわかっているのに、これを崩すためにもまずは手に取ってざっと目を通す。

一通目から、他国から魔族にあてた苦情陳情罵倒遠まわしな脅迫の内容で、気力が無残に折れそうになる。

二通目も三通目も四通目も通常運転で、次第にその紅玉の瞳から、生気の光が失われて行く。

五通目、先日使わした和平の使者が祝賀会で暴れたらしい。謝罪文は手馴れたものだ。国交問題に発展しかねないという懸念はもう遠いところに置いて来た。先方もわかってくれている。うん、そういうことにしよう、とリユはさらさら書き付けて行く。

六通目、造魔族ダンジョンメイカーが、また殺人迷宮を勝手に某国の要所近くに設置したらしい。鎧公グインに尋ねよう。そして即刻撤去してもらう。多分人間達を中に閉じ込めてフコ呪法する気満々なんだろうな、と見当がつくだけに、おそろく無理だが、お願いするだけはしてみる。

七通目、某不死公のお身内が、金髪美女ばかり浚ってハーレム作ってるからふざけんなどの罵詈雑言がデコラティブにちりばめられている。メルキオラ公におたくの甥ごさんがハーレム形成しているみたいなんで、ぶっ飛ばしてくださいとオブラートに包んで制裁し

てもらおう。多分筋肉思考だから喜んで鉄拳制裁してくれるだろう。八通目、水棲族の姫の銀杯が盗まれた後、人界で呪いを撒き散らしているので回収依頼。これは……うち、悪くないよね、悪いのは盗んだ奴だよね、とリュは書状をぐしゃぐしゃにしかけたが、まずはあのおっそろしい怪魚殿に事情を伺わねばと思う。

・
・
・

百八通目。

その案件を裁いた後、リュは完全に死んだ。
目が。

六通目の殺人ダンジョン。某国の皇太子が乗り込んだまま行方不明だっばよ。

一度深呼吸した後、優先順位を第一位に繰り上げて、皇太子のくせに冒険者の真似事してるんじゃないやねええええ！ と血涙を流した。
豪華パーティーで涙が本当に止まらない。

エルフの王女等々も身分を隠してご参戦遊ばしていたらしい。

（貴様ら自重しろおおおおお！）

頭をかきむしりたい衝動と戦いながら、リュは空中を睥んだ。

彼女にしか見えない、パラメータがある。

この世界にぶち込まれた日から、そうと気がついた日から、リュにしか見えぬ数値。

すなわち、死亡フラグパラメータ。

その予測値は、この案件が現行のままの場合、二種混合のパラメ

ータが限界突破することを指し示していた。

ひとつ、魔界以外の魔界への不信パラメータ。これが天元突破すると、勇者とかその他もろもろやつらが同盟を組んで魔界に攻めてくる。

ふたつ、魔界の裏切り者不信パラメータ。魔界には裏切り者がいます。こいつのリュに対する不信パラメータが天元突破すると、裏切り者は出奔して、対魔族ちーとスキルを身に着けた上、リュはぶっ殺される未来が用意されている。

今回は何とか事前に収めたが、魔界側の戦意高揚パラメータもある。この辺の操作は、なんだか手馴れてしまった感があってむしろ泣きたい。

そもそも、何故自分にはこのようなのが見えるのか、全ては妄想なのか。

全ては、リュの知る未来の『予言書』による。

しかし、リュに今後の奇天烈な未来について説明した『ナビゲーター』までいる以上、妄想だとしてもひとつの指標として有益には違いあるまい、とリュは早速に殺人ダンジョンの案件に取り掛かることとした。

今夜はイカを食べようか

とにもかくにも、事情を関係者に聞かねば、とリュは最近腰痛気味な気がする重い腰を上げた。

フットワークは軽くを心がけているが、東奔西走したところで、無限に沸き出ずる問題を思うと、この目の前の案件を片付けたところで差し引きプラスマイナス収支マイナスなんですけれど一体何をやっているのだろうと暗黒サイドに囚われそうになってしまう。

軽く頭を振って、リュは一番上の深底の引き出しを開けた。

そこにはみっちり『今日も二十四時間働けますか！？ 中間管理職の強い味方！ 魔界の愛情ドリンク』が並んでいる。一本引き抜くと、淀んだ目でリュは蓋を回して一気飲みした。

以前は、カッと臓腑が焼け付いて、マグマのような熱が身体中に染み渡るような気がしたが、現在は効き目が悪く、薪を新たに三本くべてみたレベルでしかない。

リュはじつと引き出しに並ぶビンの頭を見つめた。

「……もう一本いっとくか」

執事の好々爺バアルにはお控えくださいと言われているが、正直リュは絶賛栄養ドリンク中毒である。

ちなみに、この栄養ドリンク、執事が補充してくれている。月次の棚卸決算を欠かさぬ彼は、魔界簿記検定リンボ級であるが余談だ。白い手の甲で口元を拭うと、何だかふらふらとするような危なっかしい足取りで、リュは執務室をあとに――ふと背後を振り返る。

そこには『誰もいない』が、リュは一言釘を刺した。

「――今は出てくるな」

第三者には、リュが空中に向かって独り言を口にしたかに見えただろう。

リュ自身とて、現在は何も見えぬから、目視でなんとなく当たりをつけていただけである。

（あれの相手をするのは氣力が削がれる……）

彼女は今度こそオーク材のような色合いの扉を閉めて執務室を出て行った。

「鎧公」

庭園に面した回廊で、黒い甲殻類を思わせる巨漢の姿を早々と発見し、リュは今日のラック値は全部使い切ったな、と思った。

裳裾をさばき、リュはすたすたと鎧公グインに近寄った。

鎧公はリュの縦に二倍近く、横は三倍以上、腕も足も丸太のように太いが、全て甲殻で覆われている。

彼はリュの姿を認めて、挨拶した。

『ギチギチギチギチギシギシアンアン』

意識…リュ殿下、何用でござる？

脳内で訳すと、彼は割と理性的に会話してくれるのであるが、何故かリュはいつも心にダメージを負ってしまう。脱力してしまう、と言い換えても的を射ているだろう。

他の公に比べればよほど話が分かると理解しているのであるが、なんというか……察してくれ、というのがリュの偽らざる本音である。

リュの精神安寧のため、ここからは、全て自動副音声である。

「公に尋ねたいことがあるのだが、お時間よろしいか？」

『ふむ、某^{それがし}でよろしければ、お付き合いするが』

「ありがたい。実は、鎧公麾下のダンジョンメイカーのことなのだが」

『――何か問題あり申したかな？』

黒色甲殻に覆われた顔面が、微妙に表情らしきものを作った。
いわゆる、気を揉むような感じである。

「その、な。設置場所に問題があつてな。アシャンティ王国からデ
イランバークに至るエルフ街道。あの宿場町^{ダンジョン}にな、殺人級の迷宮を
無断で設置したらしい」

そこまで伝えて、リュは言葉を切った。

じいっと下から鎧公グインの目？　と思しきあたりを見上げてみる。

鎧公はしばし沈黙し、首なのか顎なのか良く分からないその節目をくきつと曲げた。おそらく、小首を傾げたのだろう。

『それに、何か問題が？』

二人の間を天使が通り過ぎた。

リュは、とりあえず深呼吸してみた。淫魔族としては平均値の胸が大きく上下する。

（大丈夫、大丈夫だ！ 通常運転だ！！）

いつものことである。

——国境？ 何それおいしいの？ 領土侵犯？ 土地に名前書いてんの？ 国交問題？ ごちゃごちゃうるせえな。よし、戦って決着つけようぜ！ おおおおお漲ってきたア！

これがごくノーマルな。非常にノーマルな。一般の魔族の思考形態であり、人族との間に深くそれはもう深く深く深淵をのぞくとき深淵もまたこつちをのぞいている的断裂を生む絶対の要因なのである。

何度この嘆きの壁の前に膝を屈したのか！

「ああー、公よ。実はこの殺人ダンジョンに、白竜族のやんごとなき皇太子が素潜りしおったそうだな。その上、きやつ探索パーティにはディランバーク氏族のハイエルフの姫などごろごろ王族級が名を連ねて皆そのまま行方不明まじごになっているそうなのだ」

『ほう。それは、見過ごせませんな』

「で、あろう。そこで、救出と同時に、この生成迷宮を消滅もしくは回収して欲しいのだが」

鎧公の賛同に、内心ほっと安堵の溜息を吐いたリュは、鎧公が口も裂けよと『晒った』のに気がついて、思わず半歩身が下がった。

『くくくく、白竜族の皇太子。いかほど強き者でござろうか。道を失っておるのなら、案内がてら某と手合わせしていただこう。殿下、

ご安心召されい』

今宵の我が大金槌は血に飢えておるわ、などと言い出しかねない鎧公に、リュは話の振り方を間違えたと言望した。

「いや、その、鎧公の申し出、まことにうれしく思うが！ 公の手を煩わせるのは私の本意ではない！ ゆえに！ 私が自身で向かうのでっ、配下のダンジョンメイカー一人借り受けたいのだがっ」

お相手は、無傷で無事に帰してください、などと頼んでも、絶対によいことにならない。子供の使いもできない魔族の皆さん、過去に何度も実証済みである。

半ば声を大きく張り上げる形で主張してしまったリュは、不意に己の肩に違和感を感じて絶句した。

「――貪欲公」

リュの手のひらほどの身長しかない邪妖精アナザーが、ちょこんとその肩に腰掛けて脚をぶらぶらさせていた。その透き通る黒い翅は丁寧に折りたたまれている。

瞠目するリュと眼が合うと、アナザーは切りそろえたいわゆるぱつつん姫スタイルの髪型で、にやりと笑ってみせた。

「くけけ、何やら面白い話しとるのう。わしも一枚噛ませい」

いやいやいやいや、とリュは心中に首を振ったが、話して通じる相手ではない。

「貪欲公の求める宝なぞないと思うが……」

「うるさいのう。ダンジョンメイカーがやらかしたときいて、わし

が引っ込んでおると思うか？ ん？ きゃつら本能で穴と穴を縫い合わせてしまうからの、時々とんでもないお宝が断層より生成される。わしの第六感が告げるのよ、この話に乗っとけとな！」

大体外れるじゃないですか、とはリュはとても口にできなかつた。この貪欲公アナザー、身体はリカちゃん人形サイズではあるが、魔力の精密操作と質量にかけては中々侮れないものがどうか、リュにとっては大体どいつもこいつも自分より強いので、普通に皆恐ろしい。

『ならば、某も一緒に参ろう』

アナザーが同行するとなれば、鎧公グインも一步も引かぬ。

魔界の二大公爵を引き連れて珍道中なぞ、リュは誠に勘弁願いたかつた。

せめて、目立たぬサイズのアナザーの方がまだしも、である。

「あー、鎧公。その貴公からはダンジョンメイカーを借り受けるだけでも充分ありがたく思うので」

『しかし、白竜族となれば、問答無用に攻撃してくる可能性もござろう。殿下を貪欲公が守ってくれるとは某あまり期待できんのだが』

アナザーを見やると、彼女は『はあー？ 金払うんか？』と可憐な容貌をぐしゃっと歪めて唾を吐いた。

彼女に対価として金銭を支払うのであれば、リュは一日を四十八時間にして働かねばならぬ。

貪欲公はその名に恥じぬ強欲婆なのだ。

すなわち、どうやらまったく彼女のフォローは期待できぬらしい。そうはいっても、鎧公は目立ち過ぎる。ステルスしてくれるような機微もない。むしろお願いすれば、いくら穏健派の鎧公といえど

も、肉体美を誇る彼に、侮辱ととられるだろう。決闘でも申し込まれたら、リュは裸足で夜逃げするよりない。

大体の魔族が、事後に正気に返って、「かっとなつてついやってしまった。でも反省はしてない」と悪びれず平気で言うのだから、鎧公にもあまり常の理性的判断というのを求めるべきではない。

（正直、この繊細な問題に配下を遣わすのはデスマーチ以外の何者でもない。私自身が行かねばならぬが、紙装甲ゆえ、ボディーガードは欲しい。欲しいが、ボディーガードが暴走しても私は止められぬ。ああ、悪夢が蘇る……）

ジレンマに陥ったリュは、無意識に二の腕を強く胸の前に交差し、肘を抱いていたが、背後からぬうつと伸びた【何か】に、背筋を悪寒が走った。

気づけは、肩に座っていたアナザーはいない。

「貪欲公？」

視線を彷徨わせたリュは、正しく次の瞬間全身から血の気が下がる音を聞いた。

（な、何で本気戦闘が始まって！？）

庭園に、黒い半球があちこち展開している。空間の断裂である。時折容易ならぬ破裂音が聞こえ、激しい戦闘を伺わせる。同時存在戦闘方式——知らぬ間にきつと彼らは【会話】して、どちらかがぶち切れ、たちまち戦闘に突入したのであるが、リュのような弱小魔族には何があったのかさっぱり分からない。

分からぬが、アナザーがわざと【相手】を激怒させようと、声をこちらに反響させたので、何となく概要をつかんだ。

「くけけけけけけ！ ケツの青い小僧めが！ ほーれほれ、わしを捕まえてごらあん！ 頭に血がのぼったのー！ ほれほれほーれ、たーっち！」

きやあ！ などというかわいらしい悲鳴を上げることにはなかったが、リュなりに驚いた。

何の前触れもなく、アナザーが己の胸の谷間からひよっこり顔をのぞかせたためである。

「ふー、金貨の寝床ほどではないが、まあまあ及第点じゃの」

ひとつ風呂浴びたおっさんのように大の字にふんぞり返るアナザーに、何をしているのか、と問い詰めること自体むなしさを感じる。大体、金貨の寝床は硬いのではないかと聞くこと自体愚問なのではあるが、それに己の胸は劣るか、とリュは妙な悲しみもまた感じられた。

ところで、すでに戦闘音は途絶え、嘘のような静けさが戻ってきたのはいたのだが、鈍いリュにでも肌にぴりぴり感じられるほどに殺気が膨れ上がる。

「くやしいのう、くやしいのう、小僧」

何が嬉しいのか、アナザーは人の胸の谷間に居座ったまま見えぬ誰かを挑発しまくる。多分物凄く悪い顔をしているだろう。

見られないのが残念でもない。

すでに殺気は飽和状態、脚が震えてきたリュはよろめいて転げそうになったところを、背後から鎧公に支えられた。

「ぬ、すまぬな」

『何の』

「自然と鎧公を見上げる形になったが、互いに声を交わすか交わさぬかの内、リュの視界はぐると反転した。

リュはそれほど慌てはしなかった。

ざわざわと荒れる無数のイカタコの触手の内に絡めとられていたからである。

「――イサーク」

半ば呆れながら、リュはそつと震える触手に五指を触れた。

「お前、本性丸出しではないか」

皇族の一人、粘菌や触手などの不定形生物系統であるイサークは、なんというか色々複雑な血統で、人種^{ヒト}でいえば、従兄弟というのが一番近い。

イソギンチャクみたいに手のひらにおさまる小さい頃から撫で回してかわいがってきたので、リュより遥かに上位種でありながら、何となく気安い感じがする。

イサークは大変器用にも、触手の襞の奥から、舌打ちの音を聞かせてみせた。

『リュ、お前、ババアに好き勝手させてんじゃねえよ』

くぐもった声は、怒りに震えていた。

好き勝手といわれても、あれは不可抗力でな、と言いながら、そういうえばと胸の違和感が消えている。

振り返れば、すでにアナザーは鎧公の頭上に避難して、イサークの無様をげらげら遠慮もなく晒っていた。

ぶちぶちと何かが切れる音がしたような気もするが、おそらく堪忍袋の緒が切れる幻聴であろう。

『ババア、殺す』

リュを保護する以外の流動するかのような触手の動きは激しくなり、アナザーはアナザーで「ああん？ やるのか、小僧」と新たに得た騎馬（鎧公）をけしかけようとしていたが、

「そうだ」

とリュは故意に空気を読まず手を打ち合わせた。

「イサーク、お前人化の術で、しばらく付き合ってくれんか」

『――あ？』

ぴたりと触手の流動が止まる。

「人界に設置された殺人ダンジョンの撤去と、内部の人命救助に向かうのだが、私一人では心もとない。公お二人が同行に名乗りをあげてはくれたが、鎧公はどうにもその身の毛もよだつ恐怖の巨漢ぶりが人目を引いてしまうだろう」

鎧公はてれてれと頭部を掻いている。

リュには、この辺の感性がまったく分からないが、本人が満足ならそれでよい。

「できれば、ステルスできるお前に同行してもらえればありがたいが……人化でも手乗りイソギンチャク化でもどちらでもよい。私は後者が好きだが、女の一人旅もいちいち面倒が多そうだし悩ましい

ところでな」

受けてはもらえぬか、とかなり本気で頭を下げたところ、イサークは舌打ちした。

『だから、俺はイソギンチャクでにやないと、あ、噛んだ』

しん、と一瞬静まり返った後、アナザーが腹を抱えて鎧公の頭上で大爆笑し、巨大なひっくり返ったイソギンチャクであるところのイサークはぶるぶると巨大な本体ごと震えたが、とにかく鉄は熱いうちに打て隙を与えぬことが肝要であるとリュは重ねた。

「嫌か？」

断られたらそれまでとは思ったが、できれば友好関係にあって、リュを誤ってぶっ飛ばしそうにないイサークが適任だ。他はなんというか、戦闘に夢中になって、【うっかり】をやらかしそうで怖ろしい。

うぞうぞとイカタコな触手をよじれさせながら、イサークはその襞奥からもそもそ喋った。

『……い、嫌じゃない』

いく。

と尻つぼみに答えた巨大イソギンチャクに、もう耐えられぬとアナザーは鎧公の頭から滑り落ち、海老反りになってのた打ち回っていた。

しまいにはびくびく痙攣していたので、よほどツボに入ったらしい。

イサークは怒髪天を衝いていたものの、戦闘にまでは至らなかった。

たので、リュはかなり胸を撫で下ろした。

今夜はイカを食べようか（後書き）

【一時パーティー編成】

・交渉者兼^{ネゴシエイター}??? リュ・リュリュリュ以下略

特筆すべき項目…元日本人で日本食が恋しい。紙装甲。栄養ドリンク中毒。三千世界の中間管理職不憫属性（世界によっては不幸属性）。イサークがいると不憫値が減る代わりに別の隠しパラメータがぎゅんぎゅん上昇するぞ！

・イソギンチャク狂戦士^{バーサーカー} イサーク

特筆すべき項目…イカタコな触手うごうご。手乗りイソギンチャクで限定魅力度UP。人化もできるぞ。幼生時に撫で回され過ぎて取り返しのつかぬシスコン。残虐性もそれなりだが、本当の口調はもっと幼いぞ！

・邪妖精^{アンシーリー・コート} アナザー

特筆すべき項目…地獄の吝嗇家。金貨が大好き。邪妖精繁殖とは別に、五百年に一度妖精の中から生まれる特別な邪妖精。他人の不幸で飯が美味い。混乱状態にないのに、味方を売り飛ばしたりはめたりするぞ！

・ダンジョンメイカー ????

雑感コメント… バランス崩壊も甚だしいよ。

歪みないその旅の間

アナザーが「ほんならとつと行くかい」といきなり転移球を展開しようとしたので、リュは死ぬ気で止めた。

「はあ？ ニュートラル座標に跳べ？ 何で遠回りするんじゃ？ ああ、分かった分かった。土下座は止めい。まだるっこしいの」

隙あらば蠅叩きしようとしてぐすね引いて狙いをつけているイサークから充分距離を取って、アナザーは空中に金字^{マーク}を転写し、転移の計算を始めた。

リュは駄々をこねられぬかと冷や汗かいたものの、存外あっさり引いたアナザーに胸を撫で下ろした。

領域には、領土・領海・領空というものがある。

あの辺はディランバーク氏族が縄張りを張っているので、いきなり告知もなく転移すれば、それこそ宣戦布告と受け取られるだろう。

例えるならば、クソまじめな優等生の目の前でタンバリンを鳴らしながら反復横跳びして挑発するに等しい行為であり、私は貴方に喧嘩を売っていますと告げるのと同じである。

衝突を避けるためこれから出向くというのに、事態を悪化させてはただの間抜けだろう。

アナザーが計算を弾いている間に、再度鎧公にお願いする。

「鎧公、ではダンジョンメイカーの件頼んだぞ」

『心配召されるな。すでに近隣にいる者を現地集合にて、呼び寄せてござる』

「感謝する」

リュは一礼し、背後から己の肩にのしかかるイカタコ触手に指先を這わせた。

「イサークよ、その身なんとする？」

『……【擬態】を考えているが』

「【擬態】か。それもよいが、久しぶりに小さくなって背中に張り付かんか？ 攻防一体で便利なんだがな」

うっかり敵や味方に攻撃されても、自己防衛のためオートマチックに背中のイサークが迎撃してくれるだろう。

安心安全絶対防衛で、紙装甲には定評のあるリュにとって実に心安らかである。

触手の襞の奥、イサークはしばし沈黙して、

『絶対嫌だ』

はつきり断った。舌打ちすら聞こえてきた。

「そうか」

地味にショックを受けたリュではあるが、この世はままならぬが常の彼女は表情を取り繕い流すこととした。

「さて、貪欲公の準備も粗方終わったようであるし」

全てを言う前に、イサークはすでに縮んでいた。

巨大イソギンチャクから、小さなクモヒトデモドキへと。

腕わんと思しき部分が、四足歩行にすくと立って、ちまちま歩いて来ると、リュの足元で止まる。

リュは笑みを零し、しゃがみ込んで両手のひらにすくい上げよう

としたが、

べしっ

ヒトデモドキは、触手と思しき腕でリュの手を払った。

更に駄目押しのショックを受けて笑顔も固まるリュであったが、イサークは勝手にリュの腕に巻きついて、うんしょうんしょとばかりに上り始めた。

そのまま肩口まで這い上ると、定位置とばかり巻きついてだんまりである。

背中拒否されたが、腕や肩なら良いらしい。

何の違いがあるのか分からないが、イサークも難しい年頃なのだ。年長者は、黙って成長を見守ってやらねばならぬだろうとリュは心にそっと思っただけであった。

ちょうどその時、頃合だったのか、

「計算完了じゃ！ 十秒後に転移するぞ、者どもよ！」

すでに複雑な金字回路を撃ち終えていたアナザーが叫び、リュは慌てて歪みの走りに身構えた。

アナザーがテンカウントを始める。

「十」

「九」

「ゼロ！」

（待て。間の数字はどこに行った！？）

つつこむ前に、問答無用でリュ達一行は転移した。
西方アシャンティへと。

リュは大地に両手と膝をついてこみ上げる吐き気をこらえていた。
いわゆる【転移酔い】である。車酔いの親戚の手ごわいおばちゃん
んと思っただきたい。

『大丈夫かよ、お姉様』

俺、あんまり治療得意じゃねえけど、とイサークがもぞもぞ腕の
あたりで蠢いているが、リュは正直動くなと言いたかった。

とりあえず、余計に悪化するので、何やら数の増えているその触
手で治療は試みないで欲しいと精一杯伝えた。

下手をすると死にますので、とはとても言えなかったが。

「まったく、軟弱じゃのお。わしが若い頃は、転移即戦闘じゃった
ぞ」

宙にホバリングする虫ならぬアナザーが器用に胡坐を掻いたまま
己の武勇伝を語りだが、それ恐らくピンポイントに相手の領域に
直接出現しまくって、たちまち侵略行為と見なされていた暗黒時代
のことだよねとリュは更に目から生気が失せて行くのを感じた。

そう、だから『魔族が世界征服に侵攻して来る』などという言い
伝えが各地に残ってしまい、実績まであるので不信感を煽りまくっ
て魔界以外の国家に包囲網同盟なんぞ結成されてしまうのだ。

次第に吐き気も収まって来たリュは、アナザーやイサークがいる
からと怠っていた現状確認をすべく、ようやく辺りを見回した。

畑である。

見事な黄金の絨毯が目前に続いて……いない。

収穫前の麦畑に突如として出現したリュ達の周囲、大掛かりに麦がべきばき外側に向かってへしおれている。

無残だ。

リュは緩慢に周囲を見ました。

そして察した。

間違いない。

ミステリーサークルを作ってしまった。

リュは別の意味で大地に再度手足をついて、不明にうめいた。

(――ミステリーサークルとか……!)

何この敗北感! とどうしようもない葛藤が己の内側を駆け巡るのをしばし耐える。

上空から見るとナスカの地上絵並のそれに、発見した農夫が教会に駆け込んで村ごと大騒ぎとなり、『神のお告げだ』いや『世界崩壊の予言だ』のと近隣を騒がせてしまうことになるのだが、リュはそのはっきりと見える可能性について考えぬことにした。

この程度は、もう水に流して漬物石を上に乗せて銀河の星星と碎けて人の噂も七十五日していただかないと、心臓がもたない。

膝小僧を払って、リュはよろめきながら立ち上がり、周囲を再度確認した。

(ん?)

違和感に眉根を寄せる。

『なんだよ?』

敏感にリュの揺らぎを感じ取ったイサークがたずねてきたが、「いや」と意味のない言葉を呟き、もう一度景色を確認した。

黄金の麦畑。

麦がばきばきに折れまくったミステリーサークル。

農家の皆さんすみません。と三つ目で心が折れかかる。

そしてリュは、ぱちぱちと目を瞬かせた。

「――イサーク」

視線を【それ】から離さぬまま、独り言めいて問いかける。

「あの案山子、なんだかこちらに近づいてきていないか？」

『ああ？ あ、本当だな。って、ちげえよ。あれ、ダンジョンメイカーじゃねえか』

鎧公が現場に呼び寄せてくれていたダンジョンメイカーは、完全に藁のかかしであった。

大体、ダンジョンメイカーというのは生態系がほとんど不明で、麾下においている鎧公自身も恐らくよく分かっていないのではないかと推測している。

彼らは一様に、『でたらめな子供の落書きや造形』のような姿勢をしていて、特殊な例だと、本当に落書きの【線】が動いている者もある。

案山子は麦畑を突っ切って、明らかに風景の一部と化し、完全なる保護色となっていたが、その顔つきが目視できるほどに近づいてくれば、無機物にはない違和感が満載であった。

鍬を背負い、のんびりした足取りで近づいてくる案山子は、片手を上げて挨拶した。

「ちわーっす。モイモイだヨー！　よろしくしてねー！　今後とも
ご愛顧賜ってヨー！」

大層軽かった。まるでヘリウムガスのように軽かった。多分普通
にこいつ浮くんじゃないかと思わず足元を確かめた。

リュは身体中からいろんな物が駄々漏れに大自然へと回帰してい
く気がした。

人はそれを気力と呼ぶ。

「……ああ。鎧公配下のダンジョンメイカーであるな。出迎えご苦
労。私は偉大なる恐怖の魔王陛下が第十七皇女リュだ。こちらはア
ナザー公、腕に巻きついておるのがイサーク皇子」

これから臨時にパーティを組むことになるため、簡単に紹介して
いくと、モイモイと名乗った案山子ならぬダンジョンメイカーはふ
んふんと素直に頷いた。

それに力を得て、リュは説明する。

「これからエルフ街道に設置されたダンジョン潜入となるゆえ、そ
なたのダンジョンメイカーとしての力に期待しておるぞ」

モイモイは力強く頷いた。

「モイモイに全部任せてヨー。今からミラクル見せちゃうヨ？」

え、おい、待て、とリュは何かいうはずだったが、現実はいつも
予想より斜め上である。

案山子の落書きそのものである丸い殴り書きの目は、カオスでぐ
るぐる渦巻いていた。

ええ、通常運転です、とリュの脳裏に何か聞こえた。モイモイが鍬を振り上げる。

「ダンジョン生成ヨー！ モイモイのビッグマグナムで殿下もエクスタシー澆刺はっらつヨー！」

待たぬかー！！！！！！ とリュは叫んだ。

叫んだが、鍬は大地に振り下ろされ、かっと白光した。

全て事後だった。

その日、アシャンティ王国にミステリーサークルと新たなダンジョンレベル3が生成され、世界破滅の予言だとか災厄の前触れだとか調査が入ったそうだが、リュは関係者の記憶をもみ消した上、全力で証拠を隠滅した。

この時、ぎゅんぎゅん例のパラメータが上昇して、リュは後始末が終わるやいなや動悸と眩暈でしばらくへたり込むこととなった。

こうして四人(?)旅の仲間は揃い、不穏と不安と一部欲望渦巻かせながら迷宮を目指すこととなったのだったが、開始前にしてすでにリュのライフゲージがこっそり削られていたことは、お察しいただけることと思う。

魔族な従兄弟が触手過ぎて、今夜も眠れない。

しらみつぶしに、レベル3ダンジョンやミステリーサークルに関する人々の記憶の【上書き】をして回ったリュは、ぐったりと宿屋の机に突っ伏していた。

モイモイに迷宮撤去させた後、ダンジョンは最初からなかったことになったし、ミステリーサークルは村人たちが自ら荒ぶる芸術の衝動に突き動かされて麦を踏み倒しまくったことになった。教会の皆さんには、「何もなかった」と報告してもらうためおとなしくお帰りいただいた。

（すまん、収穫前の時期に正直本当にすまんかった。あとで補填するから許してくれ。だが、そもそもダンジョン生成より撤去が難しいとかおかしくないか？ いらぬ時間をくった……何故殺人級ダンジョンに辿り着く前に、このような目に……）

もっばら【揉み消し】はリュの専門分野であるが、せめてこの臨時パーティの面々には、当面本題の前に自らトラブルをクリエイトするのは自重してくださいと言いたかった。

言ったところでどうにもならぬのはすでに悟りの境地まで達しているが、リュの種族的特性による情報操作にも限界がある。

さて、リュの出自淫魔族とは下級悪魔に分類されるが、その大きく共通する特性のひとつに【夢】を操る能力がある。

リュもまた一族の代表的特長に漏れず、【夢魔】としての側面を持っている。

腐っても皇族であるリュは、【夢魔】としてはいわゆる高位のリス級、【夢】引いては【記憶】や【精神】に関しては、偽りと金メッキ加工のプロフェッショナル——かもしれない。

大体いつもその能力はもっばら揉み消しと揉み消しと揉み消しに

しか有効活用されていないのではあるが……しかも精神侵食の抵抗値が高い者にレジストされれば、呪い返しとばかり打撃が逆流してしまうのみならず、本体を探查特定されてしまうこともあり、やたらめったら乱発できる能力ではない。

所詮は一般人向け、微妙に使えねーと言われる所以なのであった。

今回は精神世界に構築された【夢魔城】の配下ナイトメアやインクブスを召喚しての面目躍如であったものの、いつもそううまく行くとは限らぬので、本当に自重していただきたいものである。

ちなみにインクブスに担当の当たった村人は幸いである。よい夢見られましたね、と親指を立ててやりたい。しかしナイトメアに担当された男性村人もまた幸いである。馬面に背後からアーツ蹂躪され、別の性癖に目覚めることができたであろう。

馬面マッスルナイトメアは『フォーフォッフォッフォッフォッフォッ！』と大歓喜で踊るような足取りのまま帰っていた……とても満足そうであった……

翌日、筋骨たくましい村人の何人かが虚ろな目で「おかあちゃん、おかあちゃん」と呟き続けて寝台から出てこなかったそうだが、リュは聞かなかったことにした。記憶の上書き、塗り替えとは、犠牲なしにはなし得ぬ冥府魔道なのだ。

突っ伏したまま周囲の喧騒を聞いていたリュは、女たちの黄色い歓声にぴくりと肩を震わせた。

邪妖精アナザーが宿屋の一階に設けられた酒場の一角にて、にわか露天商をしており、女たちが群がっている。

「けけっ、これを使えば、マンネリ解消、今夜はフィーバー間違いないぞ！」

「ほんとだか！？ 骨抜きだか！？ 隣村のアリサにこれ以上おらのおっどに色目つかわせねえだよ！ 今夜はおらが畑に種さまいてけろーって誘ってみるだ！ きゃーっ」

「おらにも売ってけれ！ あ、この禍々しくも垂涎の形状のこれはなんだべーっ」

「お客さん、お目が高いのーっ、これはなんと○○で××で□□でかくかくしかじか」

「なんだって！？ そげな……はあん！ おらの口からはとてもとでも！ 妖精さんマジナイスだべ！ おらにもこれ一つ頼むべっ」

「ああんっ、こっちのこれはなんだべさ！？ えっ、そんな、まさか！？ そげな効能が……よっさ、おらも女だべっ、奮発すっから、これをこんだけ売ってけろ！！」

「まいどありー！」

リュは今度こそ聞かなかったことにした。

貪欲公アナザー、村人から僅かな金銭巻き上げてなんとする、とリュなりに思うところもあるのだが、元手ほとんどタダのものを売っているそうなので、売り上げ利益らしい。

それでも魔界の十五大公爵自らそっち系の売買で日銭を稼ぐとはなんという真似をしておるのだと悲しみがこみ上げてくる。

お前の蔵、金貨が唸ってるんだろ、とつつこみたいが、一銭を笑うものは一銭に泣くということなのであろうか。

「妖精さん、おらの旦那が、夢見が悪かったのか、今朝から『尻の穴がひぎい！』ってしきりに叫んで錯乱してるんだべ。なんかいい薬ないだかー？」

リュは思わず噴出しかけた。

（ナイトメアー！！！）

配下のせいです、明らかに私の配下の仕業です、とリュは更に突っ伏した。

指揮したのはリュ自身なので、その罪は全て私のものです、と涙が出てくる。

しくしくと顔面を覆って泣きたかった。

もうこれ以上は聞きたくない。何も聞きたくない。

一方、酒場の別の一角ではモイモイが【不思議な踊り】を披露して、やんややんやの喝采を浴びているが、お前らその踊りによって何か別のもの吸われているぞ、と忠告してやりたい。

いや、もうよい。ほっとこう、とリュは諦めた。

それより、今後の段取りについて考えた方がマシというものである。

ダンジョンには、ざっくばらんに次の等級がある。

レベル1 洞窟

レベル2 枝分かれ

レベル3 人工物（軽トラップあり）

レベル4 本格的トラップ有り

レベル5 自動生成迷宮固有魔物

レベル6 魔法トラップ（ワープゲート等）

レベル7 殺人級（固有BOS生成、固有レア有り）

レベル8 伝説級（異界ゲート生成、伝説級固有レアドロップ）

レベル9 神話級（神話級固有レア？？ ぱるぷんてぱるぷんて）

レベル10 ???？ あるのか？？？

今回は、レベル7の殺人級ダンジョンである。トラップも盛りだくさん、迷宮固有の魔物が自動生成されており、彼らは魔王配下の魔族とはまったく別の生態系にある。

つまり、指揮下になく、こちらを襲ってくる可能性どころか、実際襲撃されるだろう。

いつもそうなんだ。

全ては事後なんだ。

なんだなんだと村人たちがリュを注視して、不審をその面に浮かべた。

逃げて逃げて逃げてええええ！ とリュは懸命に訴えた。

イサークがふにゃっと触手を持ち上げた。

人で言うところ、顔を上げた、といった感じのしぐさだった。

次の瞬間、イサークは『ばきよばきよばきよあああああああああ！』といった擬音とともに、巨大肥大化分裂し、野太い無数の触手が宿屋の天井を突き抜けて天に咆哮した。

その触手には、村人たちをがちりホールドして、耳をつんざくような奇声を上げる。

きっと遠くから宿屋を見れば、屋根や窓から無数の触手が突き出し、蠢く様はさぞ壮観であったことだろう。

これ、なんて大怪獣映画、とリュは呆然と穴の空いた天井や犠牲になった村人達が吊り下げられている光景を見上げる。

リュはなんとなく懐を探った。【胃】空間宝物庫と直結のそこに、目的のものを見つけた。

『魔界の愛情ドリンク』

無言で蓋をひねって一気飲みした。

忍ばせてくれた執事の愛情が染みる。彼もぶっちゃけ武闘派だけれども、優しさは大事だ。

モイモイが「きゃっほー！ キタコレ、殿下ワイルド過ぎて痺れるヨー！」と鋏を片手に飛び回っている。何がそんなにウケたのか、リュには分からなかったし分かりたくもなかった。

また、アナザーは襲い来る触手を器用に錐揉み飛行で避けてさっ

さと外に避難した。ついで村人の懐を探る仕草に、火事場泥棒のような真似は止めなさい、とリュは注意したかった。

阿鼻叫喚地獄絵図の中、ドリンクを飲み干した皇女リュは虚ろな目で立ち尽くし、後始末について算段していた。

魔族な従兄弟が触手過ぎて、今夜も眠れない。

魔族な従兄弟が触手過ぎて、今夜も眠れない。（後書き）

【今日の語彙表現】

○夢魔城…精神世界に構築された夢魔の共有情報領域である【壺】でも【城】級のもの。主にリリース級の夢魔にしか設置できないぞ！リュ殿下は密かに【大図書館】を構築しているとの情報がリークされているぞ！

○妖精さんのお店…清く心の正しい紳士淑女青年少女の前に現れるレアもの露天商だ。垂涎もののレアアイテムが手に入るかも！？御代はちよっぴり、魂を少し盗まれるだけだよ！

○【胃】ストーン・ドラゴン空間宝物庫…ご、誤字じゃないんだからね！宝物を貯蔵する石竜の胃袋を利用しているらしい。執事のバアルが整理整頓棚卸をしてくれているぞ！

○ビオ■ンテ・イサーク…酒精を摂取すると我を失ってばきよばきよ巨大化するぞ。R18形態もあるともっばらの噂だ！残念ながら、大人の事情でよい子の皆には見せられないぞ！なろうだからね

お前の○が割れるのろいをかけたから覚悟しろ

目的地に達する前に既にライフはゼロです。

そんな気がしないでもないが、どうにかこうにかリュ達一行は推定レベル7殺人級ダンジョンへと辿り着いた。

「ほう、これはこれは」

腰に手を当てて前のめりにホバリングするアナザーの言葉には、感心の色さえ見て取れた。

緑滴る山地の参道には、不思議な形状の門がリュ達を出迎えた。

二本の柱を貫で固定し、その上に島木と笠木が渡してある。

鳥居に酷似したそれは、延々と等間隔に連なっている。まるで伏見の千本鳥居のようだ。

不明の象形文字で描かれたのぼりが風にはためき、山頂までずらりと燈に灯る提灯が吊り下げられている。

誰が灯したわけでもあるまいに……

リュは険しい表情で鳥居もどきの導く山の上を見やる。

「――【異界】が混じっているな。レベル7どころではないかもしれないかもしれん」

気を引き締めてかからねばな、と呟き、二日酔いとハッスルかましたせいでだるそうないサークがずるずるリュの腕から滑り落ちそうになるのを肩に押し上げてやった。

「ゆくぞ」

彼らはモイモイを先頭に、一の鳥居を潜った。

【トラップ発動】

は？ とリュは二の句も告げずに震撼したが、一基目の鳥居のトラップはすでに発動していた。

奇しくも、同時にイサークがすべしゃつと腕から落下して、声を呑むリュだけが――

推定レベル7殺人級ダンジョン内部に転移された。

こおおおおん、と不思議に澄んだ音がする。

岩室に響く水滴の音か。

あるいは木霊なのか。

案の定【転移酔い】にしゃがみ込んでしまいそうになったリュは、流石に警戒を怠るわけにはいかぬと口元を押さえた状態で周囲を確認した。正直壁に手をつけてしまいたいが、別のトラップが作動しても困る。

人工物の壁面には、奇妙な笑いのシンボルの仮面と交互に灯りが暗い通路を照らしている。

（やっておれん。全員ばらばらに飛ばされたのか、あるいは私だけ切り離してワープさせられた……？　しかし、あの転移揺れは、せいぜい一名分……大掛かりな転移魔法には、もっと時間がかかるし、揺らぎがあるはず……空間魔法のエキスパートであればレジストも考えられる……ならばもし迷宮に【意思】もしくは【知能】があるなら、確実を狙う……つまり私のような最も最弱のもの。パーティー内で一番弱い者を迷宮内に放り込んで、残るメンバーの焦燥とミスの誘発を狙ったものだとしたら……）

リュは手のひらで覆った口元の下、忌々しげに笑ってみせた。

（相当に【えぐい】仕様だな。なるほど）

つまり、前に入った連中も【同じ目に合った】と容易に推測される。

彼らの焦燥混乱、役に立たない集団の崩壊誘発ミスが雪だるま式に膨れ上がって全員行方不明状況を作ったのだろう。

さて、ここでじっとしていても始まらない。遭難時基本は動かない方がよいとされるが、この場合は恐らく迷宮の意向を考えるにそれは【当たらない】だろう。

イサーク達と合流しなければならぬが、救難要請ができるかまず試す必要がある。

リュは使う予定は微妙であった【魔杖・抜け落ちたアレ】を取り出した。

白い象牙のような杖であり、膨大な魔力が込められている。

ぶっちゃけ、イサークの初生え変わり乳歯である。

抜け落ちた際に、上の姉や兄が大喜びで「記念に加工してやった！後悔はしていない！」と触れ回っていた。すったもんだの末、何故かリュに贈呈された。結構便利なので重宝している。

媒体としては最適であろう。

リュは杖を撫でさすりながらコールしてみたが、うんともすんとも応答がない。

「……だろうな」

半ば諦観めいて肩を落とした。

この性格の悪さが滲み出るダンジョン、容易に外部との通信を許すとは思えない。

ジャミングされているわけだ、とリュはさっぱりあきらめることにした。

嘆息とともに前後を確かめ、ひとさし指を舐めて唾で濡らし、真っ直ぐ立てると、風の流れを確認する。

おや、と片方の眉をが上がる。『風の流れなんてぜんぜん期待していなかった』が、冷たい空気を感じる。

誘き寄せられている可能性もあるが。

リュは行儀悪く舌打ちして、「おい」と空中に呼びかけた。

「ナビ。出て来い」

しん、と答えるものではなく、通路には沈黙が枯れ葉のごとく降り

積もったが、リュは苛々とした語調を隠さず再度促した。

「二度は言わんぞ。駒が死んだら困るのはお前だろう」

ぢぢっ、と蠟燭のしんが狂おしく身悶えた。

そしてリュもまた、全身に鳥肌を立てて、その場に飛び上がった。いきなり、「ふうっ」と耳の穴に生温かい息を吹きかけられたからである。

後退って、片方の耳を押さえ、リュはおもいつきり威嚇した。

「貴様アっ、気色の悪いマネをするな！」

空中に、禪一丁の限らない肉体美を誇る下まつげばししの男が唇に人差し指を当てて、「ワ―オ」のお色気ポーズングしていた。

マッスルな男は半透明で、ふよふよと浮かんでいるが、その存在感は淫ら！ 目を離せない！

『ん、も、う！ リュ殿下ってばお短気さん！』

ばちん！ とウインクついでに投げキッスされたので、リュは思わずのけぞった。

無性にイラつとくる上、おぞましいわ！ とリュの腕に鳥肌が立っている。

「嫌がらせか！？ 嫌がらせなのか！？？？ その格好で出てくるなと何度言ったらわかるんだ貴様あああ！！！！」

『もおーっ、ぷりぷりしないのっ！ アタシは空気を読んでもうっなのっ、シリアスになり過ぎたら多分死亡陵辱フラグが立ちそうっと思って、お笑い要素で回避させてあげてるのよ。テラカワイソスワロスってアタシの思いやり？』

「ワロスといったな貴様ああああ!!」
『声を潜めなさいな。敵性クリーチャーに気づかれても知らないわよ』

頭に血が上りかけていた自分に、リュは大きく肩を上下させた。
このクソナビ、いつかナイトメアの餌食にしてやる、と固く決意する。

禪止めろって何度も何度も言っているのに……小さいころからお願いしているのに……っ
乳首見せつけんなよ……っ 股間見たくないんだよおおおおっ
!!

リュは心の中でぎりぎり齒軋りした。

「いつかお前の顎がめりめり割れたらいい。というかもうすでに割れているが……とにかく、私の座標とイサーク達の座標を解析してくれ。無理なら周辺の生体反応及び索敵頼む」
サーチ

『んもー、ちっちゃいころからナビ使いが荒いのよねーっ、まあアタシに【気がついて】くれただけでも御の字なんだけれどー。どの世界でも貴女ってばアタシに気づかないからいつともやきもきしてたのよー。はいはい、にらまないにらまない。アタシはいつでも貴女の一番の味方よっ』

ウインクは暗黒の海に沈めてやった。ナビはメタ発言が多すぎて困る。

リュは、いまだにこのナビゲーターという謎の存在について僅かなことしか知りえていない。

つまり、これが己の妄想であるなら、黒歴史通り越して病院がわが元に来たれ。

しかし、もしナビゲーターと呼べばいいんじゃないかしら？ と自ら名乗った彼が、この世界に生を受けて頭がパンしそうなリュ

のストレスの海から生じたわけではなく、本当に存在するのであれば――

『きゃっ、やだー。何これ乱気流ー。ダメダメ、全然座標特定できないわあ。言うならば表も裏もないメビウスの輪それとも境界すらないクラインの壺って感じかしら。ちよっとやだーこれ面白いわあ。ミニマムに面白いトライしてるのねー』

「私はぜんっぜん面白くないわけだが、察してもらえんか」

その程度の期待も私には許されんか、とリュは呟いた。

『かりかりし過ぎよー。貴女淫魔の癖に生前に囚われすぎなのよね。もっとフリーダムに生きた方が……ア』

ナビの『ア』があまりにも小声であったため、リュはかえって不吉に感じた。

「何だ」

『時計方向に三時の方向、生体反応有り。敵性存在も同時に補足。んんー、わんわんが十匹、まだ増えてるわあ。どうするの？』

「その口ぶりだと、イサーク達ではなさそうだな。先に目的のご一行発見かもしれん。ゆくぞ」

『んまー、戦闘力ゴミのくせに大丈夫？』

「お前本当に私の味方か？　なあ味方なのか？　味方面した敵だろ？　な、正直に言っても今なら許すぞ。今が最後のチャンスだぞ」

軽口なのか憎まれ口なのか不明のやり取りをしながらリュは先を急いだ。

正直確かに戦闘能力は5……ふ、ゴミめ、レベルなのでこのまま逃亡してしまいたいのではあるが。

（これを看過した場合のパラメータ予測値が……しやれにならん）

逃れられない運命のようである。

ナビの誘導で何度か角を曲がり、リュは最後のそれで脚を止める。おぞましい咆哮の最中、血糊でほとんど全身濡れかぶった男が一人、半ば腐乱した犬狼もどき相手に大立ち回りを演じている光景に遭遇した。

男の鎧はボロボロに腐食し、あるいは欠けて破損している。髪も髭も伸び放題、しかしその目だけはぎらぎらと、生に執着する者だけが持ちえる炎を灯していた。

（いかん、どれだけ戦闘していたのかわからんが、かなり疲労が蓄積している……）

男の闘志はいまだ費えぬ。

しかし、その体力はもはや風前の灯である。

切り伏せたと思ったのだろう、踏みつけかけた腐乱狼が、がばあ、と口をあけて跳ね上がった。

男は驚愕に目を見開き、慌てて蹴り上げたが、今度は背後から別の狼が襲う。

もはや捌き切れない。

男の青い目は絶望に染まった。

恥ずべき無毛から事情聴取

男の目が絶望に染まる。

リュは反射的に、あるいは計算ずくに【魔杖・抜け落ちたアレ】を掲げた。

彼女の口から放たれた言葉は、いわゆる【圧縮言語】であり、ワ
ンフリーズの短いそれであるが、意識すると以下になる。

『眷属よ、我が元に来たれ。あの犬ころどもを好きなだけ蹂躪する
がよい。前後上下四方八方よりもふってよい。私が許す。ちなみに、
犬ころに比べて恥ずべき無毛の男は勘弁してやれ。多分ショックで
死ぬと思うから、な、分かるだろ？ その辺のニュアンス察してく
れよ。そうだ。男の周辺の犬ころどもを思う存分嬲るのだ。お前た
ちのもふりによって恍惚の眠りへと引きずり込むがよい』

状態異常【強制睡眠】を引き起こす魔法である。

この手の状態異常は、夢魔種のお家芸であろう。

リュは他に【強制催眠】【強制混乱】等の状態異常魔法が得意で
あるが、強者には通用しないため、いわゆる雑魚向けの魔法として
ご理解いただきたい。

杖より、黒の核を持った灰色スライム状【影の者ども】が長い魂
の尾を引きながら無数に沸き出でて、腐乱犬狼もどきに次々と巻き
ついた。そして存分にもふり倒す。

何か触手を彷彿とさせる形態であるのは、触媒のせいであろう。
抵抗により、無効判定となることもあるが、今回は、存分に効果を
発揮した。

『わ、わふう』

『きゅんきゅんきゅん』

犬ころどもはひっくり返り、腹を見せて【服従】のポーズをしている！

そのまま彼らは安らかな眠りの世界へと滑落していった。

「たわいもない」

リュは『いい仕事をした』とばかり、己の額を拭った。
労働者の汗である。

ナビゲーターが「……」と何か言いたげに、微妙な表情を浮かべて空中に胡坐をかき腕組みしているが、満足げなリュは気づかなかった。なお、風もないのに彼の禪はたなびき、頭に巻かれたタルバンドの帯もまた吹き流されている。

その時、呆然と立ち尽くす男が、からん、と剣士の命である剣を取り落とした。

彼はリュをガン見しており、やがて瘡にかかったようにぶるぶると震え出す。
おこり

あ、とか、う、とか言葉にならないうめきを発し、よろよろと一歩踏み出した。

鬼気迫る様子に、リュは思わず後退すると、杖を差し向けた。

「止まれ。これ以上近寄るならば、こちらもある考えがある」

警告に、男は伸び放題の頭髪の下、驚くほどに青い目を大きく見開き、敵意はない、とばかり両手を胸の前に上げる。

「う……あ……」

何か訴えようとして、更に一步前へ。

不注意であったためか、足元の狼によりけて転げた。

立ち上がろうとするが、足腰に力が入らぬのか、手を突っぱねてまた無様に転倒する。

男は――泣いていた。

「お……お……」

まるで子供のように。

ぼろぼろと涙が零れ落ちるのを、拭うことすらもせずに、ただひたすらに泣いている。

リュは――杖を差し向けたままであったが、ナビにちらりと視線を投げた。

【無声言語】と呼ばれる精神感応によって指示する。

『照合してくれ』

ナビはたちまち行方不明の白竜族を始めとする王族構成パーティーメンバーの姿絵と照合し、回答を弾き出した。

『あらら。これは驚きネ。彼、白竜族の第二王子バルドウィーンよ。彼らの平均寿命でいうと、ここ一ヶ月間の行方不明期間では信じられないくらいに【老化】しているわ』

予想通りの回答に、リュはたちまち舌打ちしたくなった。

（この迷宮、相当だな）

第一に仲間と分断させる。

第二に焦燥とミスを誘発させる。

第三に――【時空間もしくは体感時間の乱れ】。

（外部と時の流れが異なるのか。あるいは、体感時間の引き延ばしとともに、迷宮探索者の新陳代謝を加速させるのか）

前者はかなりの大技であり、リュごときには太刀打ちできるものではない。

後者はすなわち、幻影魔法に通じるものがある。幻影の火事により『火傷した』と思い込んだ場合、実際に身体が火傷状態になることがある。これは思い込みが身体に反映されてしまうのであるが、時間において迷宮がこの男に同じ技を仕掛けたのであれば、僅かな時間で自らを老化させてしまったという可能性も捨てきれない。

すなわち、男は仲間と分断される形で迷宮に放り出されて後、数十年の時を孤独に一人さ迷い続けた、ということだ。

リュはゆつくりと杖を下ろした。

男を刺激せぬよう、大きくもなく小さくもない、優しい声で話しかける。

「――白竜族のバルドウィーン殿下とお見受けした」

はっ、と男は面を上げる。彼の瞳は左右に激しく揺れ動いている。

「私はリュ。エルフ街道に設置された推定レベル7殺人級ダンジョンにて行方不明となられた殿下方の救出及びダンジョン回収に来た冒険者です」

魔族とは名乗らない。いきなり切りかかれても困る。

リュは右手のこぶしを左手のひらで包み込み、額へと捧げる。

敵意はないと告げる万国共通の仕草である。

男――バルドウィーンも慌てて同じ仕草をした。

よし、とリュは内心ガッツポーズした。

戦時国際法により、24時間以内は互いに互いを傷つけることは

できない。

これを破れば、およそ全ての国家より信用されなくなる。

目撃者は全てKILLすればいいよ、と言いつ出しかねないのが魔族であるが、彼らは卑怯であることを何よりも嫌うため、かえってこの国際法にはもつとも忠実であると言われ、一番影でこれを破っているのはむしろ人種ヒトしゅであろうと言われる。

「……わ……わた……わた、し……は……」

男はもどかしげに口を開いたが、舌が強張ってうまくしゃべれぬ様子であった。

無理もない、とリュは頷き、隠し玉は展開の上、彼に一步一步近寄った。

やがて手の届く距離にまでとなり、上から見下ろす形で友好的に笑顔を作る。

「焦らずに。私は幻ではありません。殿下もまた。まずは安全な場所まで移動しましょう。ここは血生臭過ぎる」

バルドウィーンは伸び放題の髭の下口をもごもごと動かし、瞳を揺らめかせたが、やがてはつきりと頷いた。

ナビに安全領域検索させ、リュとバルドウィーンは二人はにわか
にキャンプを張っていた。

事情を伺いたいが、まずはアイスブレイキングすべきであろう。

リュは【胃】空間宝物庫を開いた。宝物庫には阿吽でぐちとごりぐちがある。阿側あしに引き入れていたため、取り出し可能であった小型鍋に肉団子、ベ

ーコン、野菜くずを入れ、調味料の塩コショウ、ブイヨン振りかけると、携帯コンロにかけた。

油が浮き出て、肉汁のなんともいえない芳香が充満する。

だらだらと涎が零れ落ちそうな勢いでバルドウィーンは鍋が煮え立つ前からそわそわしていたが、椀にすくってやるとお前囃んでないだろうという猛烈なスピードですすり、あっという間に全て空にしてしまった。

バルドウィーンは、時折むせつつ、食べながら泣いていた。

涙が止まらぬようであった。

リュは食後の白桃茶も沸かしていたので、彼に差し出してやる。

彼はようやく【香り】を楽しむ余裕ができたのだろう、茶の芳香を吸い込み、ひとごちついたように目を瞑って口元を一文字に引き結んだ。

しばしの沈黙を許し、バルドウィーンが茶杯に口をつけて一口すすった後に、本題を切り出した。

「さて、殿下。何があったのか、このリュめにお話し願いたい」

すでにバルドウィーンの目には、確かな理知の光が宿っていた。

彼は己ののど元を押さえ、「あ、あー」と何度か発音練習し、とつとつと話始めた。

はじまりは。

異界からの【マレビット】であったと。

「【マレビット】が……エルフに会いたいと言い、竜神がそれを許したことから……全てが始まった……警護は最高のものが……我々王族も含めて……準備された……」

バルドウィーンは途切れ途切れながら、次第に滑舌を取り戻し始めていた。

リュはパンをあぶりながらチーズを乗せる。

チーズは熱にとろとろと溶けて行く。物欲しげなバルドウィーンにひとつ差し出し、そっと視線をナビに向けた。

器用にも逆さになって胡坐をかくナビもまたリュを見つめていた。無風であるにも関わらず、奇妙な風圧をリュは感じた。

（――バランスブレイカー）

来るべき者がとうとう来たのだ。

リュは、いわば世界の異常に対するストレス値を【調律】する駒である。

だから、パラメータの上下を常に正常へ戻すべく行動を求められる。そうしなければ、【死】ぬように紐付けられている。

しかし、バランスブレイカーはその逆を行う者。

全てのパラメータはでたらめにのた打ち回るであろう。

（迷宮の発生自体が、バランスブレイカーによる二次的誘引災害である可能性は否定できない）

頭の痛いことだ、と彼女は両手で包み込んだ茶杯に口をつけた。

バルドウィーンの口ぶりであれば、彼は少なくとも、【マレビット】に好意的ではなかった。

そのため、バランスブレイカーである【マレビット】の波及効果によって【排除】された可能性がある。

バルドウィーン殿下と二人きりでは心もとないどころか、彼の不幸に巻き込まれる危険も念頭に置かねばなるまい。

（一刻もはやく、イサーク達と合流しなければ）

その前に、詳しい事情を聴取せねばなるまい。
リュは更にバルドウィーンの話促した。

経過良好ノルマ達成

バルドウィーンの話をもっと詳しく聞き出そうとした時だった。

携帯コンロの火が、ぼちり、と大きく跳ね上がった。

異変に対するバルドウィーンの反応は素早く、己の剣の柄に手をかけ、リュを背後に庇うかのように位置どった。

『空間が連結するわ!』

ナビが警告し、リュは慌てて【魔杖・抜け落ちたアレ】を胸の前に引き寄せ周囲を警戒するが、タイミングを言えば遅きに失していた。

ざくり、と目の前に空間を裂いて破れ目が生じる。

奇妙なそれは、周囲にブロック状に亀裂を走らせて行き、ばらばらとパズルのピースのように崩壊した。

その向こう側に、まったく別の通路が延びており、

「――バルドウィーン!」

男子学生服を着た艶やかな黒髪短髪美少女と思ったら、声が低かったので、美少年だった。

彼は構えていた剣を下げ、驚きから喜びへと表情を塗り替えた。

そのアーモンド形の目は零れ落ちそうなまで見開かれ、星を浮かべたような漆黒。

あれか、中性的美形という設定か、とリュは激しく動揺した。

彼女ならぬ彼を守るようにして、ウェーブした金髪に白竜族がよく好んでつける額飾りをした白騎士が前に出ており、傍らに釣り目がちなハイエルフの女性がレイピアを引っさげて凜と立っている。

それから、犬耳か猫耳か狐耳か分からないが、獣耳とふさふさの

尻尾の目じりに朱色の化粧を施したピンク髪美少女。赤と黒の着物をはだけた状態で着ており、肩は剥き出しで、帯は解けそう、高下駄は転げそう。それ着ている意味あるのか？ とリュはつつこみたかったが我慢した。

そして何故か銀髪オッドアイの無口そうな薄着透け透けワンピースというよりネグリジェな美少女もいる。若いうちから露出狂か、とつつこみたいのもリュはこらえた。

咄嗟に【彼ら】を順次確認したリュはあまりにも突然のことに思考がストップしてしまいそうだったが、それ以上に形容に『美』と『中○』が付きすぎて、もう両眼は『うおおおおお目が、目があつ！』とストライキ寸前であった。

正直言わせてくれ。そう彼女は思った。

何この下は美少女から上は美女まで美形ハーレム集団、と。

（あの白竜族は騎士の輩出で名家とされるブルマー家のカタリナ、エルフ耳はデイルンバーク氏族のスーリア姫、獣娘は知らん、無口そうな銀髪金赤オッドアイ幼女も知らん、あとはあの中性子爆弾もとい中性美少年は何故か黒の学制服、まさか日本人か？ おい、日本人か！？ というか、白竜族皇太子の姿が見当たらんではないか、どうなつとる！？）

人はそれをパニックという。

杖を握り締めたまま、リュは混乱の谷底に突き落とされていた。

ごくり、と唾を呑み込むか呑み込まないか、中性子爆弾がぱつと見惚れるような笑顔に花を咲かせた。

「よかった。バルドウィーン、バルドウィーンだろ？ あんまり様子が違うから、一瞬分かんなかったけれど、精霊がバルドウィーンだって教えてくれたし、オーラですぐ分かったよ！ 無事だったん

だな！」

背後に庇われたリュは、緊張に強張っていたバルドウィーンの肩が、僅かな逡巡の後、弛緩とも脱力ともつかぬ形でゆっくりと下がる過程を見てしまった。

「この有様だが……なんとか。こちらの婦人に助けられた」

「ん？ その人誰だ？ あ、俺は花守刹那！ はなもり せつな 刹那って呼んでくれよな。ええっと、貴女は……」

「リュと言います。冒険者です」

「へえー。貴女みたいな女性が冒険者？ あ、えっと、ごめん。侮る気はないよ。俺、こっちの常識いまいちわかってなくてさ。あーっと、つまり」

頭をかいて困った風の彼に、獣耳着物娘がふん、と鼻を鳴らす。

「主殿、見苦しい。いちいち言い訳するでない。いちいち己の出自が異界だのなんだのと触れて回るつもりか？」

「タマモ様、厳しいなあ……ってばらしてるしー。あー、うん、俺異世界から来たんだよね」

ここは相槌を打つべきであろうか、驚いてみせるべきであろうか、リュはとても悩んだ。悩んだ末にとりあえず折衷案とした。つまり曖昧に笑いながら頷いた。実に日本人の魂が彼女の根底に刻まれきっている証明であった。

しかし、他に話すことがあるのではないか。

（遭難していたバルドウィーンの状態についてとかバルドウィーンの状態についてとかバルドウィーンの状態についてとか）

「ととと、こっちも紹介遅れてるな。この人、いやこの方はタマモ様。大妖狐で、俺の式をやってくれてるんだ。あー、陰陽師って分かる？」

リュは遠い目をしないようにするので精一杯だった。

「……いえ」

「あーうん、異世界の魔法使いと召喚師みたいなもんだって理解してくれよ。こっちの銀髪ちびっこも俺の……式みたいなの？　こちらの世界で契約を結んだんだ」

こく、と銀髪オッドアイ幼女が頷く。見た目どおり無口キャラで押し通す気のようなだ。

すると、幼女を押しつけるようにして、エルフ娘がじれったそうに口を開いた。

「ちょっと、セツナ。私の紹介は後回し！？　別に紹介してほしいわけではないけれど、何で王族の私が紹介後回しなの？　順番考えなさいよ」

「……セツナ、私も忘れられるのは好きではありません」

前者はエルフのスーリア姫、後者は騎士装束の白竜族カタリナである。

「あー、スーリアごめん。俺こっちの常識よくわかんなくて……カタリナも忘れてたわけじゃなくて」

「べ、別につ、常識は……その、私と……前に覚えてくれればいいんだから」

ごによごによと呟いて後ろ手に指を絡ませもじもじとするエルフ

の姫から、紛れもない秋波が撒き散らされていたが、刹那はまったく感知していないようであった。

（鈍感スキル……こ、これは間違いなく……）

「ふふっ、私も少しわがままをいって刹那を困らせてみたかったです」

「カタリナさん……」

がつくりと肩を落とし、なんとか二人を紹介してみせた刹那に、口元を押さえにくすくすと笑う白竜族騎士カタリナ。

（カタリナ・ブルマー。本来、ブルマー家は忠節厚い白竜族きつての臣と聞いていたが、目の前のこれを見ていると疑わしくもなるな。バルドウィーンの安否……自己紹介で刹那少年をからかう前に気にせんでよいのか）

リュは内心開いた口が塞がらなかった。
想像以上に強烈だ。

（これが……バランスブレイカーの能力の一種なのか？）

本来あるべき正常な思考を奪うということなのか、もともと全員このような気があったのか、前者であれば恐ろしいし、後者であれば、やはりある意味恐ろしい。

（あらゆる美女美少女美幼女とフラグを立てまくっていると見たが……ん？）

何故か空中に漂うナビがものすごく気の毒そうな目でリュを見つ

めていた。

その口が、ゆっくりと動き、指はリュの胸を指している。

(……お、おい。まさか)

突然現れた彼ら。

出会いは偶然ではなく必然としたら？ 本流を捻じ曲げてでも運命を引き寄せる。それ自体がバランスブレイカーの能力。

そのことについて深く考える前に、もうひとつ残されていた爆弾が投下された。

「とにかくこれで安心して引き上げられるな。紫桜音^{しおん}達は別れて探索しているから、すぐこっち呼ぶよ」

バルドウィーンの背中越し、リュの対外用の笑顔が固まる。

肝心の白竜族皇太子が見当たらないことについて、懸念は確信へと至りかけている。

「あ、紫桜音は俺の妹。一緒にこの世界に来たんだ。バルドウィーンが行方不明になってすげえ心配してたよ」

「……そうか」

後半を振られたバルドウィーンの返事はどこか精彩を欠いていた。リュもまた、後ろで顔色を失っていた。杖を握り締める手が震えて来る。

うちゅうのほうそくがみだれる(バランスブレイカー)。

一人じゃなくて、二人だとか。
聞いていない。

「空間の精霊よ、紫桜音たちとの間に通路を開いてくれ！」

刹那の非常に簡素な願いとともに、再び空間がばらばらと崩れて行き、裏側から別の光景が現れた。

今度こそ、通路の向こう側、本当の純和製美少女が桜色をした指先を口元にあて、目を見開いてぼろぼろと涙を零している。

「よ……かった……バル、無事だったんだ……」

彼女はとても小柄だったが、非常に刹那に似ていた。巫女のような頭飾りと白い衣装で、清楚可憐を絵に描いたような少女である。

妹の紫桜音とやらだろう。

周囲に、今度は男性美形二人と美幼児一人が彼女を守るように陣形を組んでおり、見慣れぬリュの姿に半端ではない警戒Ⅱ殺気を発している。

恐らく白竜族皇太子らしきプラチナブロンドに肩マントの男が、冷ややかな目つきで明らかにオーバーキル機能つきの神剣を半ば抜剣しかかっていたり、魔術系統に技能を集約していそうな文系青年は笑顔のまま攻撃魔法無言詠唱始めていたり、青銀髪的美幼児はひっそりと少女の袖口にくっついてこちらを警戒混じりにガン見している。

今日もリュの死亡フラグ立ては順調なようである。

正直すまんかった

「バルドウィーンの背後の女、貴様何者だ。名を名乗れ」

とんでもない銘がついていそうな神剣と見える類の得物を抜き払いかけながら、白竜族皇太子レオンハルトが詰問する。

リュは【慌てて】杖を置き、地べたに膝をついた。外套が汚れるが、元々そういったことを想定して選んだ暗めの色地なので問題ない。

白などは言語道断である。保護色にもならんどころか、目立つではないか。

「わ、私はアドベンチャラーズ協会《灰の水曜日》ウェンズデーに所属しておりますリュと申します」

何、とレオンハルトはごく僅かに柄を握る手を弛緩させたのを見て、リュは利き手を背に回して『攻撃の意思なし』と示したまま畳み掛けた。

「高貴な方々、御身が下界より消えてすでに一ヶ月近くの時が経過しております」

はっ、と彼らは互いに視線を巡らせ、あるいは肩を跳ね上げた。すなわち、バルドウィーンは絶望ともいえる驚愕に、他の者は純粋な驚きに。

おそらく、彼らはそれぞれに【体感時間】が違うのだ。

「女、続けろ」

許可を得て、リュは肩膝をついたまま、とうとうと説明を続けた。

「協会より、このレベル7ダンジョンの生成による被害調査及び可能な限り事態收拾に努めよとの要請があつて、私が探索の名誉に預かりました。また、たまたま幸運に恵まれてバルドウィーン殿下と合流できたのです」

話を聞くレオンハルトの表情は懐疑的であつたが、真偽を確かめるべく、リュを背後に隠す形のバルドウィーンに矛先を向けた。髭も髪も伸び放題であり、血糊と埃塗れで異臭すら放つ弟に対し、レオンハルトはどこか汚らしいものを見るように厭わしげである。

「バルドウィーン、今の話、誠か？」

バルドウィーンはしばらく面を伏せがちであつたが、質疑に対しては、顔を上げてはつきりと答えた。

「腐敗した魔物の集団に襲撃されていたところを、彼女に命を助けられました」

そのまま兄である皇太子レオンハルトを強く睨み据えるかに続ける。

「もし彼女がいなければ、今私はここにいなかったことでしょう。見てのとおり、私はこの迷宮で時間の概念に見放されて一人戦い続け、この有様となりました。身体より先に心が折れかけていたところを、リュ殿には、命のみならず絶望の淵から救っていただいた。感謝こそすれ剣を向けるような恩知らずな真似はできない。兄上、エルツ、私の恩人にどうかその得物を突きつけるのは止めていただきたい。私の身内を恩知らずにしてくださるな」

彼の眼差しにも言葉にもいささかの揺るぎもなかった。

覚悟の気が背中より立ち上るかに見え、リュは内心バツが非常に悪かったが、とりあえず便乗させていただく。

つまり、あえて否定しない。沈黙は実に雄弁である。

レオンハルトは無言のまま弟をじっと見詰めていたが、その手は柄から離れることはなかった。エルツと呼ばれた文官系眼鏡男も魔法展開をしたまま解除はしない。

奇妙な緊張が彼らの間に滞空していたが、鶴の一声でそれも氷解した。

「え、あのねっ、リュさん？ 貴女が、バルを助けてくれたんだよね？ ありがとう！」

疑いに険悪な雰囲気になりかけていたのを、紫桜音が素直に御礼を言い、ね、と周囲に同意を求めるよう笑いかけたからである。

即時戦闘に移行しかねない懸念すら抱かせたレオンハルトを始めとするメンバーは、虚を突かれたように目をしばたかせ、『仕方ない』とばかり表情を緩めた。

弛緩したのはリュも同じである。いざとなれば、自爆覚悟の大技も考えていたが、それは諸刃の剣であった。使わずに済めば、それにこしたことはない。

（やれやれ、武器は収めてくれたか）

リュもほっとして、バルドウィーンとともに安堵に力を抜きかけた瞬間、

毛穴が全て開くかのような圧倒的殺意が膨れ上がった。

駄目、と口を開きかけて黙ってしまったのがよかったのか悪かったのか、後になってもリュには分からなかった。

迷宮内で、人為的に空間を無理やり連結すれば、大きな『歪み』が生じる。水面に、石を投げたようなもので、波紋が周縁に達すれば、逆算して石が投げられた場所を特定することも可能だ。

それが二回も。

より計算の精度は上がり、【彼ら】は異変の場所を探り当て、そしてリュを見つけた。

【彼】はとても怒っていた。
激怒していた。

何故なら、邪妖精とダンジョンメイカーを置き去りに転移した瞬間、信じがたい光景を目にした。

そう、脆弱とはいえ、魔族の皇女であり従姉でもある【彼女】が、白竜族に頭を垂れていたから。

地べたに膝をつかされていたから。

服従の姿勢をとっていたから。

何よりも。

【彼女】自身に、虫けらを見るような蔑視と殺意が浴びせられていたから。

だから、彼の太い【手】は彼女の胴体を巻き込んで己の元に引き寄せ保護しようとしたし、同時に周囲の人間を肉片に変えようと無数に放たれた。

この時、いろいろなことが同時に起こった。

彼の無数の【手】は男女の区別なく、全てを自動的に攻撃対象と

識別し襲い掛かった。

本来なら、一瞬の内に決着は着いただろう。

【彼】の力であれば、白竜族であろうがエルフであろうが、赤子の手をひねるようなものである。

あまりにも力が強く、ほとんど制御できていない【彼】であるが、物を壊すのだけは得意であった。

つまり、人を肉塊に変えるのであれば、ほとんど精密さは要求されない。

【彼女】だけは守ればよい。それはとても簡単なことだ。

だから真っ先に確保した。

己の不注意で【彼女】の行方が一時でも分からなくなり、そのことが耐え難いほどに【彼】を混乱と不安に突き落としていた。そのため、確保次第この常態サイズでもみくちやに撫でるか這いずり回して存在を確かめる行為に没頭したかったが、どうせ実現できるはずもないことも【彼】には痛いほど分かっていた。興奮のあまり傷つけてしまうかもしれないし、肉体的問題<精神的問題の解により、せいぜいミニサイズで引付くしかできないだろう。諸々の衝動は後でゆっくり妄想に昇華することにして、欲望は理性でぐちゃりとプレスして捻り潰す。

【彼】は動物が餌をとり次第安全な解体場所を確保するのにも似て、まずは周囲の掃除にとりかかえることを優先したのだ。

【彼】は掃除が容易であることを何一つ疑っていなかったし、【彼女】も【彼】の力を知るがゆえに不安を覚えることもなかっただろう。

いや、あるいは【彼女】——リュは一抹のそれを感じていたのであるが、大体において悪い予感というのはあたるものである。

そもそも予感というのは、第六感というより、五感で取り込んだ情報から総合的に弾き出した未来予測だ。

リュの予測は悪い方に天秤を傾けており、その傾きに足るだけの情報がすでに彼女の中に蓄積されていた。

イレギュラー
異分子。

本流は捻じ曲げられる。

「きゃあつ、セツナ！」

「主殿！！ わらわでは抑え切れん！」

「皆、下がって！」

異世界の少年は、周囲の女性陣を守るべく自ら触手を切り裂いた。一方、異世界の少女を守る男性陣は、すでに前衛が崩壊していた。

「殿下、もちこたえられません！」

「くっ、エルツ、詠唱を続ける。シオン、私の後ろに……しまっ」

悲鳴の形に桜桃のような唇を開いた少女は自衛の手段を持っていなかった。

恐怖に歪む少女に、しかし、【世界】が味方した。

リュは視界がぶれたかに感じ、吐き気と眩暈を同時に覚える。

ありえない、強制リンクだった。

彼女の脳に、直接突き刺さるような情報の断片が注ぎ込まれた。

【ナビゲーターのリンクを確認してください。緊急のため強制リンクされます。この項目はHELPを参照してください】

【緊急案件、バランスブレイカーによる味方陣営への危険度緊急に

該当する強力な能力顕現を確認】

【リスク回避のため、自動的にマインドハック能力《リリス級》により読み取ります】

【マインドハック能力《リリス級》による読み取りに成功。情報を確認します】

【バランスブレイカーの溺愛補正発動——失敗。対象イサーク（宇宙の恐怖）にレジスト成功されました】

【対象イサーク（宇宙の恐怖）のアライメント判定混沌（Chaos）・邪悪（Dark）】

【混沌（Chaos）陣営は強力に抵抗可能もしくは無効判定となります】

【溺愛補正失敗、対象のレジスト成功により、対象イサーク（宇宙の恐怖）はバランスブレイカーの《守護者》に敵対判定されました】

【バランスブレイカーの《守護者》攻撃ロック解除】

【以下精霊の愛し子発動】

【以下精霊王の忠誠発動】

【以下竜神の花嫁発動】

【以下世界に愛される全能力発動】

ドミノ倒しの一瞬で全てが布石を打たれると同時に発動し、終わった。

悲鳴を上げたのは恐らくリュであった。

肉片と液体が飛び散り、リュは頭からバケツで水をぶちまけられたかのように、全身にそれを浴びた。

リクエスト短編…いくつかの夜と朝（前書き）

この話は、突発企画のリクエスト短編です。

リクエスト内容…イサークがいかにしてシスコンになったか、イサーク視点で

リクエスト短編…いくつかの夜と朝

イサーク、と呼ぶ声がする。

彼は混沌の海にまどろんでいたが、声に呼ばれて【目覚めた】。

イサークが最初に発生【顕現】した時、彼は単純なアメーバ状生物であった。

流動する細胞質を持ち、単純細胞であって、多細胞ではなく、すなわち原核生物であって真核生物ではなかった。

彼は数多くいる兄弟の中で、発生と同時に^{ネグレクト}放置されていたのであるが、そのことを疑問に思ったり悲しんだりするような思考形態は有していなかった。

何しろ、アメーバである。

性別すらないが、彼は【彼】だった。

発生した彼は聴覚視覚といったものを持っていないはずだったが、その【声】が呼びかけ、【触れて】来ると、細胞質を悪寒めいて漣み立たせた。

嫌悪ではなかった。

むしろ、それは欲情にも類する渴望であった。

もっとも単純な細胞を持ちながら、もっとも可能性に満ちた彼は、最初に原始的な欲を覚えた。

ただし、その欲は食欲にも似ていた。

彼は【声】をもっと聞きたいと思い、彼もまた【触れたい】と願い、自らを突然変異させた。

欲望自体が、環境変化である選択圧となって彼の設計を自らデザ

インさせたのである。

仮足が飛び出し、蠢く触手となり、彼は自らに触れる何かに巻きついた。

「ちょ、おい、イサークが触手になった!」

声の主は慌てており、イサークは離されてなるものとますます巻きついた。

また、彼は何の疑問もなく、自分がイサークである、ということを受け入れ、理解していた。

言葉すらも核に由来の知識の泉から引き出すように、彼の理解の範疇であった。

「ほう、変異しおったか。うんともすんともいわんで放置しとったが、案外見込みがあるかもしれぬの。どれどれ」

細胞をつままれた上に強い力で、引っ張られたが、イサークは絶対離れまいと更に触手を増やして二重三重に巻きつく。

「……懷かれておるな」

「よし、リュよ。そなたに任せた!」

「変異させ続け、強き者とせよ!」

口々に耳障りな声たちは言い、イサークがひっしと巻きついていく何か――リュ? が焦燥したように、

「は!?! え、ちょっと、無責任な!?! え、どこに行―――転移しおった、おいっ、いつもどおりか!?!」

最後諦めてぐったりとしていた。

その頃には、イサークは【目】を発現していた。
きよろり、と目はリュを見上げる。

イサークの姿は無自覚ながら、不気味でおぞましいものではあっただろう。

しかし、その瞳は無垢であった。

実際、無垢である者ほど、どこまでも無慈悲で残虐になり、始末に負えない可能性があるのだが、それでもリュは毒気を抜かれたものか、イサークに巻きつかれた指の隙間を、反対の指でさすった。そろそろと触れる指先はおっかなびくりであり、しかし発生してから長らく放置されていたイサークには新鮮な驚きであった。

本来なら、触れるという行為は、敵対行為とみなしてしかるべき危険なものである。

しかし、イサークは『もっと』と願った。

何を『もっと』なのか、イサーク自身にも明確には理解していなかったかもしれない。

ただ『もっと』『もっと』『もっと』と強く欲望だけが膨れ上がる。

それをどうしたらよいのか、どう消化したらよいのか分からなくて、イサークには狂おしくもどかしかった。

リュの口元をじっと目は見つめ、同じような器官を発現させるべきか考慮した。

できるかな？ と彼は思慮し、できるだろう、と結論づけた。

実行するのは後回しになったが……何がリュの琴線に触れたものか、ひたすらに撫で回され続けて思考が霧散したからである。

せっかく発現した触手も解けて、イサークはアメーバ仕様となり、べちゃりと落下した。

すなわち気持ちよさのあまり、骨抜き状態であった。

リュが慌ててイサークを拾い上げ、「大丈夫か!？」と顔色を変えていたが、イサークは反応することすら億劫であった。

しかし、撫でられるのが止まってしまったことには大いに不満を覚え、仮足を飛び出して、リュの腕を捕えると強制的に自らの頭上と定めたそこに引っ張る。

もっと撫でろ、の意である。

「……あー、さっきの続きでよいのか？」

イサークは比喩として頷いた。

彼の【知識】に照らし合わせると、リュは呆れたように眉根を寄せていたが、不意に苦笑した。

リュはイサークをすくい上げると、震動をさせぬようゆっくり移動した。彼女は椅子に座り、自らのひざ上にアメーバをそっとおろして、彼の細胞質を撫でた。

イサークは震えた。

彼は一度多細胞に変化しながら、だらしなくとけたアメーバであった。

形質を保つことができない。

りゅ、と彼は呼んだ。

誰にも聞こえないだろう。

でも、彼は、りゅ、と呼んだ。

気持ちよくてたまらない。

再び、自らの奥深くから欲望の声が湧き上がる。

『もっと』

『もっと』

『もっと』

何を『もっと』なのか。

何が足りぬというのか。

この姿では駄目だ、というのだけは、彼にもはっきり分かっている。

た。

『もっと』大きくて。

『もっと』強くて。

今度は。

何が今度なのか分からない。

でも、そうしなければならぬ。

そう思うのと同時に、その『もっと』は大きく振れて歪む。

どうしようもない、彼の本来の性質が、奥の奥から叫んでいる。

それは無視できない本能だ。

後に、イサークは己の救われぬ性質というものを知ることとなり、悩み、葛藤することになる。

つまり、イサークはリュをぐちゃぐちゃにしたかった。

大切にしたいと思うのに、ぐちゃぐちゃにしたかった。

それはあまりにも強い衝動で、未成熟で若い雄が同種の雌に向ける性欲と酷似していたが、イサークの情欲はむしろ食欲と同義であつただろう。

イサークはリュを取り込んでしまいたかった。

だが、相反することに、絶対に嫌だった。

そんなこと、できるはずもない。

その薄暗い衝動と向き合う前に、もうひとつターニングポイントがあつた。

しばらくして後、彼は己の姿を見て絶望することになる。

リュが目の前におり、イサークのことを怖がらないから、自分もまた彼女と同じような姿をしていると思っていた。

触手などの器官を発生させており、それを駆使しておきながら、何故かイサークは自らの姿をリュと同じ生物であるかに思い込んでいたのだ。

しかし、鏡を見て、彼は絶句することになる。

あまりにもリュの姿と違った。到底同じ生物とは言えなかった。醜かった。

驚き、慄いて後ずさり、後退する自分の移動手段が無数の仮足であることに気づいて、声にならない絶叫をした。

死ぬほど悲しかった。

おぞましきよりも、イサークは悲しくて動揺した。

こんなのは、嫌だ。

イサークは慟哭した。

——りゅと、おなじになりたい。

まだ小さなイサークは、無数の目から涙を流して、自らの手足を切り離した。

リュが駆けつけた時、そこはひどい惨状だった。
イサークは、人型に変形していた。

だが、それは無残な変形だった。

かろうじて、人の姿に見える残骸であり、かえって人を模倣しているゆえに目を覆いたくなるグロテスクであつた。

剥き出しのその姿は、醜く、惨たらしかった。

イサークはなんかちがうな、と思ったが、でも、りゅとおなじ、と鏡を覗き込んでいた。

頭はひとつで、腕は二本、脚も二本。頭髪はまばらで、ここがちがうのかな、と頭をひねっていた。

そして、背後に、顔面蒼白となって、紙よりも白く血の気を失つたリュの表情と鏡に映る己の姿を比較して、

——ぜんぜん、ちがう

と天啓的に悟つたのである。

突如イサークを羞恥が襲った。

見られたくない、と強烈な衝動が突き上げた。

『こっち、みるな!』

イサークは喚いた。

安定性の悪い二本脚で、転げそうになりながら慌ててカーテンを自分の身体に巻きつけた。

彼は震えていた。

——ちがう、ちがう、こんなのぜんぜんちがう。

見られたくない。

アメーバやイソギンチャク様だった時よりも、もっと酷く、リュと己の相違を突きつけられた気がした。

悲しくて惨めで恥ずかしくてイサークは混乱していた。

そのイサークを、巻きつけたカーテンごと、二本の腕がそっと抱きしめた。

驚き身が竦み、イサークは顔を上げることができなかった。

無数の目の時と違い、顔を伏せてしまえば、視覚は狭く制限された。人もどきになってたつたひとつだけ、よかったことだ。

イサーク、と吐息がこぼれおち、彼はその甘さに一瞬酩酊した。

「どうした？　急に人化しなくなったのか？」

覗き込まれ、耳に柔らかい言葉で問いかけられる。

「はじめてにしてはとても上手にできているが、あれは不定形種にとってはなかなか難しい。とても痛かっただろう？　痛いのに我慢したのか？　えらい子だ」

白い指先がまばらな頭髮を梳いて、頬を辿る。

イサークはじつと下を見つめていたが、何度も頬を撫でる白い手に、おずおずと視線を上げた。

リュが心配そうに自分を見ていた。

「ごめんな、周囲に人型が多いから、同じになりたかったんだな。世話役が人型の私だし……魔族にはいろんな形のものがいるから、無理に人型になる必要はないんだよ。明日には、人型以外の連中を連れてきてやろう。むろん、お前が人化したいなら妨げるものではないよ。手伝うから、安心しなさい。でも、急ぐ必要はない。急いで大きくならなくてもいい。急がなくていいんだ。ゆっくりでいい」

それに、とリュは伏目がちにして、口の端を持ち上げた。

「私は、お前の普段の姿もとても好きだよ」

イサークはますます俯き、無理やり人型に留めていた姿を解いた。それは、不自然に折りたまれた四肢を思い切り伸ばすのにも似ていた。

イソギンチャク様となった彼は、床の上にもそそと蠢き、恥じ入るように縮こまった。

「……おいで」

膝をついたままかけられた声は優しく、保護者然としていて、イサークはもやもやとしたが結局逆らうことができなかった。

更に彼はもそもそと緩慢な動きでリュの膝上に乗り上げると、居心地悪そうに蠢動し、やがて小さく丸まった。

認めざるを得ない。

彼の本来の形質にはなく、まだ『早過ぎた』人の姿より、この原型はずいぶん楽であった。

人の似姿は、いずれは彼の設計図に書き加えられるべき姿であり、彼の望みは選択圧となって望む方向にデザインされるだろう。

しかし、まだ『早い』。

そう、恐らくまだ何もかもが。

イサークには自身の望みの在り処さえ分からずにいる。

ただ、リュにゆっくりと撫でられて、彼は力を抜いた。

彼本来の残虐で破壊衝動へと向かうその本質は、慰撫され、別のもので満たされてた。

きっとそのままであれば、彼もリュも幸せだっただろう。

満たされても満たされない。

欲望は大きく育つ。

寄生する怪物のように。

怪物は本当に怪物になってしまいうだろう。

イサークは怪物を内側に飼っている。

それが大きく育つまで。

彼を内側から食い破る日が来るまで。

いくつの夜と朝を。

でも今は、膝上でまどろむ彼はその欲望の行き着く先も知らない。
だから、それは一幅の幸せな光景に過ぎなかった。

ちょっと夢見が悪いと思ったら現実の方がアレだった件について

生温かい液体を浴び、リュは呆然としながら、意識が暗くなるのを感じた。

いけない、と思うのに、どうしても逆らえない強烈な衝動だった。シヨックだから？

それもあるだろう。

だが、それ以上に、きっと『予定調和』の異臭がした。



小さな姪が、近所の男の子に苛められて泣きながら帰ってきた。

「男の子なんてだいきらい！ 皆消えちゃえばいいのに！」

ぐしぐしと目をこすりながら言うので、【わたし】は、「でも男の子と女の子がいないと、赤ちゃんが生まれないよ？ 唯も、お父さんとお母さんがいないと生まれなかったんだぞ？」と適当になだめようとしたのだが、かえって猛反発を食らった。

「お父さんいなくても、お母さんがいればいいんだもん！ お母さんが生んでくれたんだもん！」

いやまあ。

確かにそうではあるけれど……えーと……他に言葉を重ねてみたが、子供だと思って侮るもんじゃない。

いい加減な説明はかえって姪を怒らせ、論破されるばかりだった。これはいけない、と私は腰を据えて説明することにした。

日本庭園は緑に濡れ、築山山水に滲む季節の色、点々と飛び石が散らばる。

獅子脅しが、かこん、と音を立てた。

外は平和なのになあ、と横目に庭園を見やりながら、まずは席を立つと茶菓子の準備をする。

熱い茶を注いでやりながら、私は姪にいきなり遺伝子の話から始めてしまった。

不器用なんです、勘弁してください。

「ええっとな、唯。お前の髪は黒くて、目も黒い。顔はお父さん似だが、性格はお母さん似だと言われるな？　これはね、お前の姿かたち性質に現れる【形質^{けいしつ}】という」

「けーしつ？」

「そう、形質だ。この形質を決定づけるものが、遺伝子だと思えばいい。いいかい、お前のこの肌」

つんつん、とほっぺをつついてやる。姪はくすぐったがって、ひっくり返りそうになった。

「この肌をとっても高性能な顕微鏡で覗いてみよう。するとね、こーなってこーなって、こーんな細胞がいーっぱい並んでいて、唯が出来ているんだよ」

私はチラシの裏に□を描いた。これ、細胞のつもりなんだ、察してください。

と思ったら、早速姪からブーイング食らった。

「えーっ、四角じゃん！」

「うん、これはモデルだけど、この四角を細胞としよう。すべての生物は細胞でできているんだよ。つまり、私達は細胞の集合体だといえるね」

「細胞の集合体……」

「この細胞の中には、エネルギーを作り出すミトコンドリアやたんぱく質を作るリボソームといった器官が入っている。この中で、私たちが生きていくのに必要な様々なタンパク質が作られ、唯の身体を作っているんだ」

「ふうーん」

大雑把過ぎる話でも難しいかな、と思ったが、姪は膝を正して真剣に四角を見つめていた。

「さて、四角の中にひとつ、まるを描いてみよう。これは【核】だ」

「あ、私これ知ってる。DNAでしょ」

うんうん、我が姪は賢いなあ。まあ昨今、なんでもDNAという言葉が乱舞しているからな。

「そう。この核の中にね、唯の【形質】を決める遺伝子情報の書かれたDNAがあるんだ。遺伝子というのは、細胞や親子間で伝えられていく形質の因子のことだね。遺伝子が書かれたものがDNAだ。DNAがどんな形をしているか知っているかい？」

「あ、テレビで見たことある。二重らせんでしょ？」

「よく知ってるね。そうだよ、二本の鎖がお互いに絡み合った形をしている。これは暗号テープみたいなものでね、遺伝子情報がぜんぶ暗号で書かれている」

「暗号ー!?!」

「そう。暗号。暗号は全部で4文字ある」

うむむ、話がなんだかずれてきたが、暗号の言葉に姪が目キラキラさせているので、私は脱線を許すことにした。というのに、

「暗号四文字すくなっ」

早速再びブーイングをもらってしまおう。

「うん、少ないけれど、これはね、アデニン チミン A、グアニン シトシン T、グアニン シトシン G、グアニン シトシン Cの四文字から出来ていて、これを塩基という」

私はさらさらとチラシの裏に四つの文字を書きつけた。

アデニン A
チミン T
グアニン G
シトシン C

「この塩基の三文字組み合わせでひとつの暗号を作るんだ。三つの塩基による暗号のことを【コドン】というね」

「こどん？ 三文字で暗号になるの？ えっと、いくつできるかな……あ、分かった。4種類あるから、 $4 \times 4 \times 4$ で、64とおりの組み合わせができるね。例えばATGとか？」

姪、下手すると私より賢い……と目が遠くなりながら、私は話を続けた。

「そうだよ。DNAテープ上の三つの塩基による暗号、すなわちコドンは、それぞれタンパク質の元になるアミノ酸を指定している。ATGなら^{メチオニン}Metというアミノ酸だ。ただし、実はアミノ酸は二十種類しかないので、この64通りの組み合わせは、重複した暗号と

なり、同じアミノ酸を指定していることもあるんだ」

「どんどん脱線しているので、そろそろ元に……って、これもひとつのファクターではあるか。」

「開始コドンの話までするかなあ？」

「少し頭を悩ませていると、姪は考え続けて、自分の中で整理を始めたようだ。」

「ありすちゃん、ちょっと待ってね。えっと、えっとさあ。細胞の中に核があって、核の中にDNAがあって、DNAっていうテープの中に暗号が書かれていて、この暗号は塩基っていうATGCの四文字でできている。三つの塩基で一つのコドンを作っているんだよね？ このコドンが、二十種類のアミノ酸を指定していて、アミノ酸はたんぱく質の元なんだよね？」

「そうそう。賢いなーおばちゃんへこむわ」

「え？　なんで？」

「なんでもないよ。そう、でね。DNAはとっても大切な情報だから、外には出ないんだ。代わりに、mRNA（メッセンジャーRNA）っていうDNAのコピー屋さんが、とってもとってもながーいDNAのテープから、一部分だけ転写^{コピー}して核の外に持ち出するんだよ。するとタンパク質工場のリボソーム^{リボソーム}ってところにこの情報を持って行って、暗号を翻訳してタンパク質を作るってわけ」

^{ウラシル}Uやプラスマイナス鎖、ヌクレオチド単位、tRNA（トランスファーRNA）、40Sサブユニットだのなんだの話はまた今度でいいわ……

私は茶を啜った。

「いってみれば、DNAというのは、遺伝子情報の暗号鎖であり、タンパク質の設計図をたくさん収めた大きな【図書館】ともいえる

ね。その大切な設計図をmRNAは転写して工場まで持っていくというわけだ」

さて、と私は再び喉を潤した。

「おおざっぱに言うと、私達はDNA↓RNA↓タンパク質の流れでその集合体を作って生きているともいえるね。ざっくりばらんにいうと、この一連の流れを【セントラルドグマ】と言うんだよ」
「かけー」

女の子がそういう言葉使いをするんじゃないや、とは私も散々言われたのでなんとも言いがたい。

「なんだかずいぶん話がそれちゃったな。ちょっと元に戻すよ。最初にDNAは二重らせん構造だって話をちょっとしたけれどね。これは塩基がこういう風になっている」

A—T

G—C

「何これ？」

「二本の鎖はね、必ず同じ組み合わせで互いに連結しているんだ。この繰り返しでテープは出来ている。さっき言った暗号だね。その組み合わせは、AはTと、GはCと塩基が対になるようになっていく。何故か分かるかな？」

唯は腕組してうーんと考え込んだ。

「唯、ヒントだ。細胞は分裂するよ。分裂する時、鎖はどうなっちゃうかな？」

「ああーっ分かった。細胞分裂する時に、かたっぽずつ別れるんだー！」

「うーん、半分正解かな？ 一本ずつになっちゃったら、次に分裂する時もうないよ？」

「えっと……じゃあ、分裂する時にもう一本作るのかな？ あ、分かった！ 必ず塩基が対になってるってことは、一本ずつ別れた時に、AはT、GはCのペアを複製すれば元通りになるよ！」

賢すぎるぜ、我が姪……

私は内心引きつる思いだった。

「そう。つまりね、鎖が別れても、元の鎖を鋳型にもう一本複製すれば、最初の二重螺旋型に再生できるの。これが生命の単純にして美しい構造ってわけだなあ」

うんうん、と私は頷いてしまった。

「ところで、先ほど話した細胞分裂はね、【体細胞分裂】という。

これを繰り返すことによって私達の身体は保たれているんだ」

「なんかその言い方だと他にも分裂に種類がありそうだなあ」

「ご賢察のとおり。【減数分裂】という特殊な分裂がある。私達のDNAは、引き伸ばすときとても長くて核の中に納まりきれないので、ボールに巻きつけては折りたたんで保管されており、これを染色体という。染色体は23対、46本あってね。23本はお父さんからもらって、もう23本はお母さんからもらったもののさ。体細胞分裂では、これがいつも倍に複製されて、それぞれの細胞に分かれて入っていくから、元と同じ数になるんだよ」

「ふーん。減数分裂ってことは、逆に減るのかな？」

「そう。これはちよっと何か動画でも作らないと難しいかなあ。まあ、とりあえず染色体は元の数にならずに、ランダムに分かれて半

数の染色体を持つ細胞ができるんだ。なんでかというとな、染色体の数が元のままだったら、お父さんとお母さんからそれぞれ染色体をもらったら、倍になっちゃうよね？」

「46本だもんね。あ、そっか。23本ずつお父さんとお母さんからもらうから、予め染色体の数を減らしておく必要があるんだ……」

思わず姪の頭を撫でてしまった。

「さて、考えてごらん。体細胞分裂のように同じ細胞を複製していくのは、ある意味一人でできるからコストがかからない。こういう生物はね、実際にいるし、極悪な環境下では一匹で増殖することも可能だ。でも、私達はわざわざ雄と雌に別れて何故生殖するんだろうね？ 雌が一人で分裂すれば、相手を探したり、増殖に貢献しない無駄飯食いを養ったりするコストがかからない。でもどうしてわざわざ子供を生むこともできない、生物界において多くは子育てに参加もしない、増殖のお荷物になってしまう穀潰しの雄なんて性を作ってしまったんだろう？」

いやはや、思わず顔がにやにやしてしまう。

「さあ、考えてみて」

答えは簡単。

減数分裂による配偶子は、ヒトの染色体数は23対あることから、2の23乗 $\parallel$ 8, 388, 608 通り生じることとなる。

そして雄というファクターと有性生殖を行えば、8, 388, 608 通りの2乗 $\parallel$ 70, 368, 744, 177, 664通りの次世代が生じる可能性があるのだ。

そう。

眩暈のするような数字。

遺伝子のプール。

世界中で有性生殖が行われ、私達は36億年も昔に、『遺伝子のかき混ぜ（シャッフル）』という船に乗ってこの大海に乗り出すことを選択した。

そうしなければならないからだ。

私達は。

そう。

『その場にとどまるためには、全力で走り続けなければならない（
It takes all the running you can do, to keep in the same place.）』

——『鏡

の国のアリス』 ルイス・キャロル



目覚めた時、リュは、吐き気と眩暈とともに、見たくもない顔に覗き込まれて、危うく嫌悪を表に出すところだった。

「よかった、目が覚めたんだな！」

かなりの距離の近さで満面の笑顔とともに、花守刹那とやらが彼女の手を握っていたからである。

（ここは――）

白い、どこまでも白いイメージの部屋。高価な調度品は、繊細極まりない金細工で化粧を施され、遮光カーテンがはたとひらめき、突き抜けんばかりの青空が広がっている。

空気が薄い。

明度が高い。

（ああ、ここは――）

「ここは、白竜城だよ！」

そろそろ泣いてもいい頃ですか、トリュは自分が死んだ魚の目をしているだろうことを確信した。

ちょっと夢見が悪いと思ったら現実の方がアレだった件について（後書き）

高校生レベルの遺伝子講座、一部伏せたり例えのため捻じ曲げた部分がありますので、ご了承ください。

ただしイケメンに限るがこの地域の法律です

自分は呪われているのではなからうか、とリュは真剣に思案したくなった。

だが、その前に、考えるべきことは山ほどあった。

（そうだ、まずは一体【あの後】どうな——）

そこまで思い巡らして、リュは咄嗟に無理やり情動をねじ伏せた。ねじ伏せたにも関わらず、動揺は顔色に現れ、血の気を引かせていた。

「大丈夫か！？ 気分悪い？」

心配し、慌てふためく声色から、決して悪い人物ではないのだろ
うと思った。

奇妙な言い回しだが、憎むに値すらしい善良な人間。

ただ、彼を取り巻く何かが、常軌を逸脱しているのが問題なのだ。

（扱いやすいかもしれぬが、かえってその善良さゆえにトラブルメイカーかもしれん、可能性は常に念頭におかねば……）

本当に気分が悪かったのではあるが、あえてそれを隠さず、リュはするりと握られた手を抜いて口元を覆い、『体調が悪いです』とあからさまな演出をしながら頭を回転させていた。

リュ自身に、高貴なる者の義務とやらが適用されるのか、魔族の生態を鑑みるに甚だ疑問を呈するところではある。

しかし、少なくともヒト族の王侯貴族であれば、敵地において身内の訃報に心を揺らして隙や弱みを見せるなどということは、まず侮蔑されてしかるべき醜態であろう。

（そ、う。少なくとも、私は何があったのか、分かっている――イサークは自分の力をほとんど使いこなせていなかったが、そんな簡単に滅びるはずが――でも、バランスブレイカーはこの世界の律とは別の存在、常識が通じないだろう。まさか本当に……いや、ここが白竜城であれば、何のけいも感じられないし、通信手段すらない。だから、不確定なことで嘆き悲しむのは恐ろしく無駄で何一ついいことなどない）

リュにできる一番のことは、ボロを出さずに、速やかにこの城から脱出し、味方に連絡を取ること。

貪欲公は恐らくこれまでにない『異変』に、彼女いわく『戦略的撤退』『背後への前進』を選んだことだろう。

それは正しい。

正しいが、彼女が何をやらかすが、リュの心胆を寒からしめている。

自分を理由に、全面戦争だけは本当にご勘弁ください、とリュは何か上位の存在に神頼みで土下座したくなる。

（いや、それはないっ、きつとない！ 弱さが罪の世界だ！ 自己責任だし！ 身内が滅ばされてもメルキオラ公とかふっつーに勝者を褒め称えるくらいだし！ そうなるとイサークがもし生きていたら逆におおおおっそろしいことになるではないかつ、あれの思考形態は割と身内認定がヒト種寄りだし、ダメージから回復した後には、普通に領空侵犯の上本拠地侵入、奪還にやってきて無茶苦茶に……せせせ戦争ではないかーっ！？ 死ぬっ、本気で死ぬ！ 生きてる場合の最悪の事態も想定して、早くここから脱出した方がいい）

苦しそうなふりをしながら、実際にリュは今後考えうる展開に、胃の辺りが本気で痛んで来て冷や汗をかきつつ苦悶した。

（まずはあの後何があったか情報収集。それから速やかに撤退。優先順位は後者とする）

何事も、命あってのものだねだ。

それまで、ひとまずイサークの生死については頭から追い出す。ただできることをするだけだ。

それが最短の道。

「ごめんなさい、あの後何があったのか、分からなくて、ただ気分が悪くなってしまっ——」

弱弱しさすら装ってリュが面を上げると、大変刹那の顔が近くにあった。

思わず顔面が固まって仰け反りそうになるが、必死にこらえる。

（ちけーよ、少年！）

前世の己が蘇り、内心言葉遣いが乱れるが、それも仕方ないと許してしまいそうになるほどの至近距離だ。

親子でも、よほど小さな頃でなければこの距離はないだろう。

夫婦や恋人なら別であるが、刹那とリュはいわば赤の他人であり、潜在的には究極の敵でもある。

刹那はリュの目をまっすぐに見つめ、どうやってもありえぬ近さで、破顔した。

「あんな目にあったら誰でも気分悪くなるよ。大丈夫、恥ずかしが

らなくてもいいよ」

ああ、なるほど、とリュは合点した。

冒険者と名乗ったし、確かにグロテスクな光景に気を失ってというのは、本当に酷い醜態だ。

リュが真実冒険者であっても、そんな軟弱な奴は仲間にしたくない。

おとといきやがれである。

「……お恥ずかしいところを」

頬を染めて視線を反らすという芸当をやったのけながら、リュは別のことを考える。

（だが、アレはショックで昏倒というより、状態異常魔法の効果に似ていた——私は何の【影響】を受けたんだ？）

危機的状況と判断されたため、直前にナビと強制リンクされ、情報次々と入ってきた。

刹那の妹である紫桜音が、世界法則（じょうしき）をぶっ飛ばす勢いであらゆる加護守護恩寵を受けており、敵性存在からの攻撃をオートマチックに迎撃破壊する機能を持っていることは嫌というほど確認できてしまった。

あの自動迎撃にリュもまた巻き込まれてしまったのだろうか？

（しかし、単純に攻撃力カンストってレベルじゃないぞ、あれは……対属性で200パーセントダメージというより、1000パーセントダメージという感じだったな……イサークはもろに混沌（Chaos）・邪悪（Dark）の暗黒破壊属性だから、多分あの娘は法と秩序（Law）・善（Light）の光輝属性の加護で……相

性悪すぎるだろうおい……)

しかも、攻撃力より遥かに恐ろしいのが、マインドコントロール系の能力だ。

強力な魅力効果。チャーム

チャームは、夢魔系も駆使するところだが、あくまで一時的な効果で、これも状態異常魔法の一種である。

しかし、これが究極の溺愛補正さめないゆめと来たものだ。

解析によれば、Law属性はもつともこの効果を受けやすい。

逆に、Chaos属性はレジストする可能性もあり、イサークはレジストした――

(攻撃してきた敵性存在がレジストに成功し、だから徹底的に破壊された――何か引つかかるな――)

あまりにも、庇護対象の性質と、それはかけ離れているのではないか、という考えが泡立ちのように浮き上がる。

無論、リュも紫桜音という少女の性格や嗜好をほとんど知るよしもないのだが、兄である刹那を見ても、無茶苦茶にかけ離れた反社会的性質を宿しているとは到底考えがたい。

大体、それなら彼女はイサークと同じ属性になってしまいうだろう。言葉少なに思考の海に沈んでいたためか、刹那は何か彼の中で推しはかるものがあつたらしい。

いきなり。

ぽん、と頭に手を乗せられた。

(……は?)

あやうくりュは口に出しかけたそれを、ぐうっと呑み込んだ。

ぽん、ぽん、と立て続けに頭を柔らかに叩かれ、髪を撫でられた

からだ。

リュが子供ならよかっただろう。

しかし、リュはどこからどうみてもヒト型の成人女性である。

初対面で、いきなり頭を撫でる行為を、世の女性陣は普通に「ナニこの勘違い男キモイ」と称するだろう。ただしイケメンを除く、と言うかもしれないが、リュはイケメンだろうがなんだろうが、勝手に身体を触られるのは好きではない。

淫魔族ではあるが、その性質には目を背け続けているリュであればこそ、嫌悪もひときわかもしれない。

不可抗力ならともかく、何故この場面で頭を撫でようという結論に陥ったのか、そもそもそれを妄想にとどめず実行するにいたる思考回路が解せぬ、とリュは口元が引きつりそうになった。

頭皮は敏感な部分だ。

髪の上を滑る指先の感触は、嫌と言うほど伝わってくる。

（こんなことをして喜ぶ女がいるわけ——いるんですね、分かります）

振り払うのではなく、ちょっと、と自然に手の甲でかわそうとしたリュだったが、扉を開けてじいーっと無機質な目で見上げる銀髪オッドアイ幼女と、愔気で顔を紅潮させるエルフの姫スーリアと、「あらあら」と腹黒い微笑をしている女騎士カタリナ、不機嫌そうな狐耳着物娘タマモのメンバーに、常識とはところによりけり、と固まった。

幼女がとてとてとやってきて、「ん」と頭を刹那に向かって差し出した。

きよとん、と刹那は目を見開いて固まっていたが、リュは助け舟を出してやった。

「頭を撫でて欲しいようですよ」

自分から望んでのこと、決して人身御供ではない。

刹那は「あ、なるほど」と笑い、リュの髪を一撫でして、今度は幼女の銀髪を撫で撫でと触る。

リュの内側を不快を通り越して怒りのような衝動が突き抜けたが、それをこのメンバーの前で表に出すほど思慮に欠ける行為はないだろう。

女性陣がそれぞれに表現しながら、我も我もと群がる様子に、リュはどこか他人事であるかのようなそれと、同時に恐れにも似た感覚に身体を震わせた。

バルドウィーンの時も感じたのだが、彼女達のプライオリティが何よりも刹那になってしまい、周囲への配慮が見られない。

元からの性質なら残念な人たちで済むが、そうでない場合——あらゆる意味で脅威だろう。

（溺愛補正とやらが、好意を植えつけるのみならず、理性や思考を霞がからせるものであれば、それは本来の人格といえるだろうか？）

それは人格の消失に等しいのではないだろうか。

厄介な、とリュが目を眇めた時、新たに闖入者があった。

何でもよいが、皆ノックしようよ、とリュは思ったが、白竜族においてはこれが常態であれば、郷に入っては郷に従えということだな、とリュはすでに諦めていた。

「刹那！ リュさんは目覚めた——！？ 精霊が騒いでいて——あ——」

飛び込んできたのは、息を弾ませ、頬を紅潮させた紫桜音だった。彼女は寝台に上半身を起こしたリュと目があうと、へなへなとその場に座り込んだ。

「よかったあ。目が覚めたんだね」

大きな目が安堵の涙に潤む。彼女は目をこすると、ぱんぱんと裾を払い、立ち上がってリュの傍までやってきた。

そのまま呆然と見上げるリュの前でこめつきばったのようにおじぎし、ひたすら謝罪した。

「ご、ごめんなさい。私を守ってくれる精霊たちが暴走して――竜神さまも怒っちゃって、全力で攻撃しちゃったみたいなの。リュさんのこと、全然考えずに力をふるって、私叱っておいたから！ ごめんね、びっくりしたよね。怖かったよね。私も怖くて、怪物に教われて、恐怖に負けちゃって、それで」

「馬鹿、紫桜音、落ち着けて」

こっん、と刹那が軽く手の甲で暴走しがちな妹の頭を叩いた。

「あ、う、うん。すーはー、すーはーっ」

息を吸って吐き出し、「お前それで落ち着いたつもりかよ」と刹那の突込みを受けながら、彼女は「よし！」と気合を入れた。

「リュさん、本当にごめんなさいっ！　それで、身体の調子はどう？　つらいところはない！？」

「い、いえ。大丈夫です。それより、状況がつかめなくて、あの後一体何が？　そもそも私は何故ここに？」

「えっ、刹那何も説明してないの！？　何してたの！？」

詰め寄る彼女に、リュは「いえ」と遮る。

「私がしばらく具合が悪かったので、落ち着くまで話ができなかったのです」

「え、そうだったんだ。で、でも、具合が悪いつて」

青ざめる紫桜音に、リュは微笑んでみせた。

「今は大丈夫ですので、よければ事情を教えてくださいただけないでしょうか？ 協会への報告がありますので助かります」

「う、うん。それなら……えっと、あの後リュさんが気絶して、襲ってきた魔物は竜神さま——あ、私の守護をしてくれている神さまなんだけれど、竜神さまと精霊王たちがやっつけてくれて」

微笑が凍りつきそうになる。だが、リュは静かに頷いて先を促した。

「で。でもね。あの魔物凄く再生力が強くて、皆がやっつけてくれても何度も再生するから、本当に怖くて——」

思い出したのか、ひっく、と紫桜音が喉を鳴らし、鼻を絞り上げた。その肩を刹那がそっと抱く。

「ご、ごめんなさい。あんな怖い、気持ち悪い魔物初めてだったから……」

聞きたくない、と脳の片隅で別のリュが騒いでいる。

でもリュはその自分を容易に押し潰した。

聞かねばならない。

何しろ、本人の証言など、ここから去ってしまえば、生で聞く機会などそうそうないだろう。

貴重な機会なのだ。

紫桜音は、人差し指で涙を拭うと、にこつとけなげに笑ってみた。

「でも、みんなで力を合わせて、やっと倒したんだよ。だからリュさんも安心してね」

リュは無表情になる代わりに、微笑を面に張り付かせたまま尋ねた。その手はシーツを強くつかんで白い筋が浮き上がる。

「そうですか。よかった。それでその強い魔物の死骸は？　もう再生しなくなったのですか？」

ええっと、と紫桜音は気まずそうな顔をした。刹那の方を見やる。刹那もまた少し困ったように空中に視線をさまよわせたが、決意したのか、励ますようリュの手を握った。彼の背後で何か悲鳴に似た声上がるが、彼の耳には聞こえなかったようだ。

「こんなこというと怖がらせるかもしれないけれど、あの魔物、何故か再生するたびにリュさんを襲おうとしたんだ。多分、意識を失っている状態で一番弱い者から狙おうとしたんだと思う」

リュは口を開け、喉元にせり上がる熱い塊を必死に飲み下した。

「多分、そういう理由だから、怖がることはないよ。安心していい要領を得ない。

苛立ちにも似た衝動に手をつきかねた時、

「あのねっ、刹那のいうとおりだから、もう大丈夫だから！　えっとな、私、巫女なの。この世界では神子っていわれてるの。えっと

ね、えっとね」

「だから落ち着けて」

「う、うん。深呼吸、深呼吸」

再び紫桜音は大仰に両腕を開いては閉じ、深く息を吸って吐き出す。

「私、清めの力を持ってるの。だから」

彼女は何か言ったのだろう。

しかし、リュはうまく聞き取れなかった。

違う、聞き取ることを拒否したのだ。

この娘は何を言っているのだろう、とリュは目を見開いていた。

そんなこと、許されるわけがない。

「リュさん、すっごく顔色悪いよ。しばらくこの城に滞在するとい
いよ」

にぎやかな彼らはその後もあれこれラブコメ真っ青に騒ぎ立てて
いたが、「リュさん顔色悪そうだよ」という紫桜音の言葉と、ちよ
うど彼女を迎えに来た皇太子の登場により、リュ一人を残して彼ら
には立ち去ってもらった。

部屋はしんと静まり返っていた。

リュは両手の指を固く組み合わせ、己の額にあてて身体を折り曲
げる。

疑いようもなく、紫桜音のアライメントは善性だ。無垢だ。

（しかし、実は、無垢には善悪などない。結果は陰惨となろうとも、
その性は無垢でしかない。時にその行為は善とされ、逆に悪ともさ

れる。視点移動で砂時計にも似て、上下はその時々により変わる）
善意から出た悲惨。

「――これでは、何の対抗手段もない」

いや、と彼女は否定する。

（少なくとも私自身は【私自身】だ）

リュはイレギュラーかもしれない。だが、もう一人、実例がいる
ではないか。

その時、コンコン、と扉をノックする音がした。
リュの目が鋭く細まった。

飲む、打つ、買う、の内ひとつ選択せよ

「どうぞ」

ノックに対し促すと、扉が開き、姿を現したのは半ば予測していたバルドウィーンであった。

彼は、色あせた髪を切らず、髭を剃る事もしなかったようだ。

もさもさと顎鬚や口髭が伸びている。剃ったら意外ともう少し若いかもしれないが、雰囲気自体が何やら哀れを誘う。

憔悴して影のある表情は、どこかたびれたサラリーマンを演じる聖林映画の野生派ドル箱俳優のようである。

（イケメンは何をやってもイケメンだって某俳優好きのニューハーフの外国人の友人が吼えていたなあ）

言語教育関係の講義で知り合ったのだが、生前からオカマとは縁の深いリュである。

彼女（？）のコメントについては、まあ、否定はしない。

ともあれ、リュは敵地にあり、バルドウィーンもまた彼は白竜族の王族である。

気を緩めてはならない、が。

確かめねばならないことが、お互いあるようだ。

バルドウィーンは緊張して探るような面持ちで近づいて来た。そのまま何故か自分のつま先に視線を落としてしまう。

「……気分は」

もごもごとした末に、搾り出したのは途切れがちなご機嫌伺いである。

（この人は……もしかして無口というより、あれか。コミュニケーション苦手なのか!？）

何十年も一人で迷宮をさまよい続ければそうなくても仕方ないとはリュも思うのだが、根本的に何か違うオーラが出ている。

何かに似ているような、とリュは少し首を傾げ、

（……あ、分かった！ ゴールデンレトリバー！ しかも常時しょんぼり系!!!）

それで、思わず。

リュは顔を背けて、口元に手を当てると噴出してしまった。

不可抗力であった。

がっかり大型犬と思えば、勝手に壁も取り払われてしまいそうになる。

「わ、私は……何かおかしいことをしただろうか……」

指を開いたり閉じたり、更に影を濃くしてしまう男に、リュは慌てて謝罪した。

「申し訳ありません、あの、ちょっと気が緩んでしまつて。先ほどまでとても賑やかだったので……」

バルドウィーンの顔に、はっきりと緊張が走った。彼は絞り出すようにようにして問う。

「その、気分は？ 何か変わったことは？」

矢継ぎ早に尋ね、目を見開くリュを見て、彼は耐えかねるような大きな身体を丸めたかに見えた。

顔を覆い、床に膝をつく、臓腑の底から吐き出すかのように彼は謝った。

「申し訳ないことをした。本当に申し訳ない。今の貴女には分からんだろうが、命の恩人をこのような」

「ちょ、ちよっと、待ってください！ 何か早合点されておられませんか？」

ぶつぶつと謝罪を呟き続けていた男は、「は？」と途中で言葉を止めた。

今度呆然とリュを見上げたのは彼であった。

「殿下。ここはお互い腹を探り合っても平行線です。正直ベースで参りましょう。私、彼らに法外な好意は持っておりません。具体的には、刹那殿に頭を撫でられて、私の育った環境では、初対面の女性の髪を触るといった行為は非常識と感じました」

早口に伝えると、バルドウィーンは、ぽかん、と口を開けていた。

「殿下、口を閉じてくださいませんか。腹筋が崩壊いたします」

「あ、ああ、うん。そ、そうだな」

彼の視線はきよろきよろと定まらない。ものすごく動揺している。挙動不審を絵で書いたら、多分この人の姿になる。

（駄目だ、この人……はやくなんとかしないと）

あれだ。

大量に犬を飼っている家の主人が長期出張から帰宅した時、飼い犬たちが主人に殺到していた。

殺到しそびれて、大きなゴールデンレトリバーが彼らの輪に加わりたそうに、物欲しげにうろろうしていた光景を見たことがある。

自分の存在を主人に訴えたいけれど、訴えられない不器用な大型犬。

似ている。

似すぎている。

あのしょんぼり感に酷似し過ぎて、胸が痛いレベルである。

「わ、私はてっきり……いや、つまり、このようなことを言う頭が狂っていると言われるかもしれないが、その、つまり」

リュは彼の言葉をさえぎることなく、頷いて、ゆっくり話して欲しい、と目で訴えた。

男の目に薄い涙の膜が張ったかに見えた。

「……皆が、皆が……」

言葉が続かずに、彼は拳を額に押し当てて、ほとんど寝台の端に顔を埋めるように背を丸め、うめいた。

「正気なのは、私一人なのかと……こんなことは、狂っている……」

シートに広がる染みに、彼の涙を見るのは二度目だな、とリュは思った。

バルドウィーンが落ち着くまでは少し時間がかかった。

「申し訳ない、醜態ばかりを晒している」

うな垂れて何度目の謝罪となるのか、大型犬もといバルドウィー
ンが縮こまって口にしたが、リュは首を振った。

「いいえ。泣くことができる、というのはよいことだと思います。
泣けなくなったら、そちらの方がきつとよくないでしょう」

リュはあまり話題を引きずるべきではないだろうと判断し、まず
は寝台を出て話を進めようとしたのだが、逆にたしなめられてしま
った。

「まだ本調子ではないだろう。気にせずそのまま話してくれ」
「そうですか。ではご好意に甘えさせていただきます。でも殿下、
せめて椅子に座ってください。私も落ち着きません」

膝をついたままのバルドウィーンは苦笑し、椅子を引いて腰を下
ろした。

「まずは、と言いたいところだが、リュ殿。貴女はすぐにでもこの
城を出た方がいい。ここは、貴女の思う以上に危険な場所となつて
いる。事情を詳しく説明したいところだが、そうもいかぬ。ここは
私を信じてとまではいわぬが、信を預けて、私の願いを聞いてはく
れないだろうか」

真摯であり、リュもまた城を出られるなら諸手を上げてぜひお願
いしたいところではあった。

数時間前なら。

しかし、今は事情が変わった。

リュは、お言葉はありがたいのですが、と断った。バルドウィー

ンの顔に絶望がのぼるのを見て、互いに腹を割って話しましょう、と再度告げる。

「殿下の懸念の一端、私も理解しております。私は状態異常に関する専門家なのです」

はっ、とバルドウィーンが面を上げるのを確かめ、リュは言葉を続けた。

「この城は——いえ、【彼ら】を取り巻く人々の状態、通常ではありえません。魅力系魔法は一時的に対象を虜にしますが、永続的なものではありません。あくまで一時状態異常を引き起こすもの。ここで起きていることは、通常ありうべからざること」

リュはまっすぐに男を見詰めた。

「永続的魅了効果。禁術もしくは異界の技。殿下のご懸念はこれでしょうか？」

バルドウィーンはしばし無言であった。

城の内情として、あまりにもまずすぎる。

他国に漏れでもしたら——だが、彼は葛藤の末に『否定しない』ことを選択した。

それで十分だった。

「しかし、殿下は免れ得ている。——何故でしょうか？」

例えば、とリュは独り言のように唇を開いた。

「レジストに成功したのは、元々受容体がないから。私の見立てで

は、アライメントがChaos属性のものは、鍵と鍵穴の關係に例えると、鍵穴レセプターを持っていない可能性が高い。ただし、鍵は学習し、自在に鍵穴に合わせて形を変えることも予測され、万全ではない――現在、Law属性である限り、この永続的魅了をレジストする可能性は限りなくゼロに等しいと思います。とすれば、あるいは、すでに、別の『何か』に感染している――」

いや、とバルドウィーンは遮った。

彼の口元は皮肉に引きつるようにして笑いの形に歪んでいる。

「前提条件がすでに間違っている。私は白竜族においては、はみ出し者でね。そのうち、口さがない噂を耳にするだろうから先に言っ
ていこう。私は竜化することもできない出来損ないだ。こんな私にも皆は優しくしてくれたがね、まあ一段下を見るように慈悲を差し伸べてくれたわけだ。そしてそんな卑屈なことを考える私のアライメントは、そもそもLaw属性ですらない。Light属性ですらない。私は鍵穴をもっていないんだ」

次第に俯いてしまう男に、リュは――強烈に頭を撫でたいと思った。

（ゴールドレトリバーが、しょんぼりしょんぼりしている！！！！
し、静まれ私の右腕ええええええええええ！！！！）

思わず左手で右腕を押さえ、苦悶しながら自重した。

（刹那少年と同じレベルになってしまわないか！？）

「殿下、通りすがりの旅人ゆえに無責任な発言となりますが、通りすがりゆえに申し上げます。お気になさるな。アライメントLaw

—Chaosなど、所詮生まれた時に、神々が定めたただの占い判定のようなもの。時に入れ替わり、Light—Darkは特に生き様に左右されるようですが、そんな簡単に心をラベリングできるものではありません」

そうだ。

リュの中にも、善があつて悪があり、秩序があつて混沌がある。全て矛盾を孕んで存在するよりないのだ。

そして、そんな四角四面なことは、彼自身も分かっているだろう。

「少なくとも——貴方は貴方のままでしょう。魅了系の無残で恐ろしい結末は、本来の人格の阻害、永続の果ては人格の消失です。殿下はこれを見過ごされますか？」

あるいは、その方がよいのかもしれない。立ち向かう勇氣は美しい。だが、相手を見ずに打ちかければ、時に無謀の代価はその命だけでは済まないだろう。

そうとすらリュは思いながら、あえて尋ねた。けしかけたのだ。リュもまた皇族であるがゆえに。

「見過ごせるわけがない——例え艱難辛苦の道であろうとも」

それが私の義務だ、と彼ははっきり答えた。

だが、リュは念を押すことにした。

「その道が泥の道でも？ 不名誉を被っても？ 人々に罵られ、誤解され、指差されることになろうとも？」

バルドウィーンの目に迷いはなかった——わけではない。

彼はすでに十分罵倒されていたし、冷たい目で見られてもいた。

だから、現実になんかそれがどれほど辛いことなのか知っていた。

苦しい道に耐えられるか？ 即答する奴なんぞ、信用おけない、とリュは思う。

迷い、迷って、だが迷いを振り払わず、意思の力で、その決意でもってねじ伏せる。

ならば、信ずることができる。

彼が頷いてみせた時、リュは笑った。

「よかった。では、協力してください。あ、私平和主義の魔族です。ちなみに皇位継承権は下から数えた方がはやい程度の皇族です」

バルドウィーンの顎が落ちた。

できれば最後まで伏せたかったが、事情が変わった今、魔族であることを伏せていては話が進まない。

これからの前提条件なのだから。

博打ではあったが、少なくともリュは賭けにかかったようである。

せいっぱいできること

瞠目したまま固まったバルドウィーンは、やがてばきばきと石片を落とすのにも似て、次第に身体の硬直を解いた。

「……ずいぶんあっさりと打ち明けてくれたものだ」

そして、彼は確かに皮肉ともとれる、あるいは心底おかしげに笑った。

「なるほど。道理で肝がすわり過ぎていると思った。そうか——リュ殿、そうか。魔界の宰相であらせられたか」

リュも少し困ったように会釈した。

「こうして顔をあわせるのは、お初にお目にかかる、と言わなければならないね」

リュとバルドウィーンは直接に顔を合わせたのは、ダンジョン内が初である。

しかし、書簡でやり取りしたことはある。

魔界宰相、とは要するに外界からの苦情窓口であり、内政においては何でも屋程度の扱いである。

魔界の事情を舐めてはいけない。

学級崩壊しているクラスで、押し付けられた委員長レベルのそれである。実際、魔界に組織立てというものはこれまで一切なかった。個々に単独にそれぞれに活動する彼らは、上下関係というのはあくまでパワーによるものでしかない。

名こそが、つまり名誉こそが彼らの全てなのである。

その頂点に立つのが魔王。下克上は奨励されてしかるべきものであり、切磋琢磨とは聞こえがいいが、年中闘争に明け暮れていい汗流している、それが魔族。

ついでに、国外にも「俺より強い奴を探しに行く！」とはた迷惑な侵略行為を繰り返す。それが魔族クオリティ。

無論リュは泣いた。

とりあえず、苦肉の策で、リュは定期的に天下一武〇会ならぬ魔界一武道会を開催することを上申し、御前会議にて満場一致賛同された。

ノリノリに喝采し、ブラボーブラボー絶叫する彼らの姿、瞼の裏に焼きついて離れぬ、とリュはいまだに遠くを見つめたくなる。

この意図は、公的なイベント実施によるガス抜きである。

魔界はこれのおかげで、ずいぶん落ち着いた——リュは積極的に外交にも精を出した。

ネガティブキャンペーンを張るだけ張りまくってきた過去の所業、拭うためには別方面のアピールが欠かせぬ。

魔界一武道会またの名を魔界トーナメントにも、国外から選手を招致し、観客すら呼び寄せた。近年は王侯貴族が照覧に訪れるほどである。

裏どころか表で大金も動いている。

通常では見られない娯楽に、退屈を持て余した連中の食指が動き、付随してヒト・モノ・カネが動く。

魔界もある程度外に開かれるようになった。

とはいえ、魔族Ⅱとんでもねえ奴らのレッテルはいまだ完全に払拭できていない。しかもあながち間違っていないところが、リュに心の汗を流させる第一要因である。

特に世界警察を標榜する白竜族には、疑いどころか汚物のような目で見られていることをリュは重々承知している。

彼らとのやり取りにどれほど気を使ったことか！

かつての世界大戦勃発秒読み開始前ほどの緊張感を取り払われた

ものの、リュがここにすることは、まずもって非常にまずい事態であらう。

もちろん、勝手につれてこられたわけだし、皇太子も経緯は自ら采配しているから、不法入国だどうのと騒ぎ立てることはできないはずだ。

暴露されても国交問題になることはないだろうが、あまりおおっぴらにしたくはない。

また、彼らも天井知らずのプライドゆえに、皇太子自ら魔族を白竜城に引き入れた、という事実は明るみに晒したくはないだろう。一番いいのは、お互いに『魔族の皇女はここに来ていない、うっかりお持ち帰りしていない』という暗黙の了解に落としどころをつけてしまうことだ。

こうした微妙な調整というのを、白竜族は実務として誰が引き受けているか、というところ。

バルドウィーン王子なのであった。

白竜族において、魔界側とのやり取りは、汚らわしいと唾棄されるべきものであり、つまり――汚れ役である。

誰も進んでやりたがるものではない。

王族級の名がいる時、第二王子のバルドウィーンが貧乏籤を引かされていたというより、自ら買って出た。

すなわち、二人は初対面でありながら、初対面ではなく、ある意味旧知の仲であった。

ただし、顔合わせをしたことはないのだ。

何しろ、白竜族は絶対に魔界領土に足を踏み入れない。

魔族を彼らの領土に入れることも忌避している。

リュは多くの書簡のやり取りを各国としているが、恫喝まがいのそれに白竜族扱いずれええ！　と思いつつも、具体の話を進める際は、実務担当者は話が分かるなあ、といつもありがたく心中頭を下げていた。

恐らくバルドウィーンがいなければ、二、三回は白竜族と魔族側

の戦争が勃発していたと思われる。

白竜族は頭に血がのぼった結果として。

魔族側は通常運転仕様の闘争本能により嬉々として。

「どうにも——驚かされることばかりだ、いや」

口調を改めようとするバルドウィーンにリュはこれまでどおりをお願いしたいと言い、二人は改めてそれぞれに情報をお互い交換することとした。

「——では、刹那殿たちは、なにがしか目的を持ってこちらに召喚されたというのですね？」

リュの言葉に、バルドウィーンは頷いた。

「ああ。彼らの話では、【星図】を完成させることが第一の目的らしい。それを完成させることによって、この先訪れる過酷な運命を覆すことができるという。彼らは神が遣わした神子であり、救世主である、と我が国も認めている。我らの竜神が告げ、紫桜音をその神子あるいは花嫁として恩寵を与えているためだ。刹那殿も含め、聖獣、四大精霊から祝福を受け、彼らはあらゆる Law-Light の加護を得ている」

「【星図】——先に訪れる過酷な運命？」

鸚鵡返したリュにバルドウィーンは眉根を寄せた。

「恐らく、彼らの話ぶりでは、【星図】は彼らにとってのキーパーソンの魅了だと思う。彼らの操る不思議な薄い箱か鏡のような物体があるのだが、そこに魅了する相手の名前が浮き上がり、【好感度】を最大まで上げること何か力を手に入れられるようだ。度々【攻

略【ルート】【フラグ】【好感度MAX】【イベント】などと言っていた。私には多々分からないこともあるが、むしろ分からぬふりをして色々聞き耳を立てたし、彼らは二人とも頓着せずに会話していたからな」

リュは、思わず、額を押さえてうめいた。

「――異世界恋愛シュミレーションゲームか、おい……」

ちよつとそこまで露骨とは思わなかったぞ、世界システム……と両手をつきたくなる。

誰が設計した、誰が！ 責任者出て来い！！！ と彼女は叫びたかった。

いや、分かりやすくてありがとうございます、というべきなのか。

（だとすれば、【星図】とは、攻略リストみたいなものか？ 全部埋められたら私のジ・エンドか！？ しかも【イベント】！？ 嫌な予感しかせぬ！ あれだな！ きつと魔界大戦とかあるんだろうな！ 悲劇展開はさぞおもしろうな！ パラメータの予測線上下を見るに、結論として死ぬ！ どうせ私は立場的に噛ませだろう、死ぬということだな！ しかし死なんぞ、ナビがいる以上、私は彼があちこちで観測したという【わたし】のように盲目ではない。フラグは全部叩き折る！！ 勝てば官軍！ 勝てば官軍！ 勝てば官軍！！！！）

呪い紛いの自己ドーピングをして、リュはきつと面を上げた。先ほどの『異世界恋愛シュミレーションゲーム』との言葉に、頭をひねっていたバルドウィーンは、リュの据わった目に、びくつと椅子の背に張り付いた。

「おそらく、【イベント】というのは、【好感度】を上げるだけでなく、大きな彼らの物語の進行に伴い、ターニングポイントとして配置されているでしょう。とりあえずこれ以上の悪化は——阻止します」

「あ、ああ。しかし、何をどうやって」

「彼らのやりたいことを片っ端から邪魔します。最終的には、思い通りにならぬことによって、この世界を忌避させます。自らお帰りいただくのです」

リュは言葉を重ねた。

「バルドウィーン殿、貴方の懸念を教えてください。貴方が一人迷宮に追放されたわけを。考えられるとすれば、貴方は恐らく攻略対象であつたはず。なのに、追放された——つまり対象を外れたということ？ 攻略対象は固定ではなく、随時入れ替わっているのではないでしょうか。大切なのは数なのかもしれません。あるいは、必修と選択があるかもしれません。分からないことだらけですが、少なくとも貴方は不要とされた。邪魔とされたのです。おそらく、貴方はイベントの進行を妨げたのです。だから弾き出された」

バルドウィーンの顔から血の気が引いていた。

彼は膝上に指を固く組み合わせる。

「——リュ殿。貴方は精霊という存在をどう思う？」

口を開いた彼は、的外れなことを言い出したかに見えたが、そうではないとリュには分かった。

本題なのだ。

答えを間違えてはならぬ。

「精霊、ですか。よく刹那殿たちが口にしますね。正直に言えば――自然の代弁者、自然のアニマ、火、水、土、風に代表される元素の具現化――」

そこまで口にして、リュは口端を吊り上げた。

「――とは全く思いませんね」

バルドウィーンが目を瞬かせる。彼の肩から目に見えて力が抜けた。

つまり、正解だ。

「連中自身はそう思っているかもしれませんが、彼らもまた生物の一種に過ぎない。水中や土中に環境適応している生物がいるのと同様に、彼らもまたひとつの異種であると思います。進化の中で、あのような種に別れた我らの同類と言えるでしょう。だから自然の代弁者と名乗るのは、要するに一種の選民思想ですね」

それに私は、どこからでも無粋にスパイされるのは好きではありません、とリュは締めくくった。

バルドウィーンといえば、呆れたようにリュを眺め、それからくつくつと肩を揺らした。

「やはり貴女も魔族なのだろう。過激な思想を持っている。そのようなことを口にすれば、狂人扱いは免れ得ぬ。だが、すっかりしたよ。ああ、確かに薄々私もそう感じていた。あまりにも、精霊とは恣意的だ。気まぐれで、残酷だ。ある者には溢れんばかりに加護を与え、ある者は徹底的にいたぶる。私は――」

言いかけて彼は首を振った。

「いや、私事だった。まずは――レインダードシアカのイナゴの大発生から話さねばならん。貴女はもうご存知だろうか……」

リュは話を聞いて絶句した。

むしろ、馬鹿な！ と声を張り上げた。

「そんなことをすれば、地力はむちゃくちゃになる！ 兵に薬物使用するようなものだ！ 一時的に土地が回復しても、数十年単位、いや百年単位でその土地はサイクルが壊れ、二度と回復できなくなるぞ！ 精霊を過信し過ぎる、連中はそこまで万能ではない！！」

丁寧語も吹っ飛び、リュは拳をシートにたたき付けた。土地を巡って争いが起きる。地力が枯渇すれば、餓死者は今回の比ではなくなるだろう。

「そんな馬鹿なことを、許したというのか！？」

言いざま、リュは口をつぐんだ。許さなかったから、バルドウィンは孤立し、追放され、戻った今も冷ややかな目で見られる。だから彼は、刹那たちが去った後、人目をしのび隠れるようにして一人ここを訪れざるを得なかったのだ。

レインダードシアカのイナゴの大発生は、昨年の冷害もあって、地獄のような飢饉をもたらした。

あの国には、絶対的血統制度があり、酷く露骨で残酷な身分の壁がある。隷属身分は国家公認で【石投げ】と呼ばれる差別民が存在するくらいである。

差別民は、最も餓死者の出ている層だ。

「目の前に、救える命があるのなら。それが、彼らの言葉だ」

バルドウィーンは言った。

精霊の力を使って、大地に強制的に急速な実りを。

確かに必要だ。正しい。美しい。

だが、善が最善とは限らない。

長いスパンで見れば、更なる地獄が大きなあぎとを開けて待っている。

まして、他国の事情、内政干渉だ。

白竜族が、他国の領土の環を破壊する。サイクル

その結末は？

こんな馬鹿なことは、到底正気ではできない。

「せめて、援助で済ませるべきだ——」

それならば、惜しまない。

バルドウィーンは再度頭を振った。

「貴女も知っているだろう。冷害の影響はレーンダードシアカに留まらない。どの国も余裕がない——魔界を除いては」

つまり、白竜族は絶対に魔族を頼らない。

リュは急ぎ寝台から降りて行動を開始した。

目は口ほどにものを言う

中庭に面してアーチを描く回廊を歩きながら、空の近さ、空気の澄み切った様子に、誠空中城であるな、とリュは思考する頭の片隅で考えていた。

バルドウィーンとは打ち合わせた。

少なくとも、彼の放逐紛いのお気の毒な結末は同情に値するが、リュとしてみればよくぞ身体を張って止めてくれた、と正直喝采して、彼が誠にレトリバーであれば一緒にお散歩ゴー！ などころである。

いや、大変失礼な話なので、脳内に留めたが、リュとしてみれば、いくら頭を下げても足りない。

先に実現していれば、取り返しのかぬ事態になっていただろう。針の先にバランスを取るような争いと争いの谷間である平穏なぞ、一気に崩落だ。

目先数十年単位で戦火の炎が、ヒトも大地も舐めるように埋め尽くす。

その炎の上を、リュは歩いて行けるだろうか？

その時、魔族がどういった立場で関わるかといえ、多分――考えたくない。

（まだ、地力は乱されておらぬ）

だが、少なくともそれは先延ばし行為に過ぎない。

刹那たちが考えを変えぬ限りは、根本的には解決していない。

（ならば、いっそ――！）

リュは真っ直ぐに前を見据え、裾をさばいて歩き続けた。

白い花の咲き零れる東屋で、刹那や紫桜音たちはお茶をしていた。他にエルフのスーリア姫と着物姿獣耳のタマモ、オッドアイ銀髪少女、同じく青銀の神の美幼児、そして――巨大な白虎が寝そべっている。

リュは足を止めた。

彼女が口を開く前に、「あ！」と刹那が気づいて席を立つ。

「リュさん、寝てなくていいのか？」

お気遣いどうも、とリュは首を振った。

「寝てばかりいては身体が腐ります。もう十分養生させていただいたので、お暇しようかとご挨拶に伺いました」

努めて平淡な声とすると、刹那は一瞬何を言われたのか分からないうようなきよとん、とした表情をした。

リュはもう一度重ねた。

「バルドウィーン殿下に印状をいただきましたので、このまま転移門まで下がらせていただく予定です。皆さんにはお世話になりました」

一礼すると、エルフのスーリアはあからさまにほっとした顔をし、タマモはその主に枝垂れかかりながら、「ふん」と鼻を鳴らした。幼女は無表情、青銀美幼児は紫桜音の袖口をぎゅっと握って不審者を見るような目でリュを見上げている。

（バルドウィーンによれば、この幼児が、竜神の未熟な現身うつしみ、か。神性存在の切れ端とはいえ、誠に文字通り未熟なことよな。女に骨抜きで己の本分も忘れたか。神とは名ばかり、哀れなものよな）

リュは僅かに冷めた目で小さな竜神とやらを見つめ返したが、すぐに視線を外した。

では、と踵を返そうとした彼女の腕を、痛いほどの力で後ろから刹那が握る。

「——ッ」

声を押し殺して振り向いたリュに、刹那が煩悶するよう眉根を寄せ、大きな黒い瞳でリュを見据えていた。

「待ってくれよ！ そんな、急過ぎるよ！」

何がだ、とリュは言葉を吞み込む。

「いえ、でも私も協会に報告が済んでおりませんし、次の仕事がありますので」

皆が嘘ではない。次の仕事は腐るほどある。城に残してきた部下達は大変優秀な事務処理の女戦士たちだが、流石に彼女達だけで全てを回しきることはできないだろう。ある程度は回るよう組織立てしてきたつもりだが、魔公レベルの案件は、リュが決済せねばならない。

「そんなのっ！ そんな場合じゃないんだよ！ あ、ごめん！ まだ調子悪いと思って、説明は後にしようと思ってたんだけど——」

声を荒げかけた刹那は後半声量を落とした。そんなことより、つかんだ腕を放して欲しいとリュは思ったが、黙って彼の言葉を聞く姿勢を見せた。

刹那はそれで落ち着いたのか、きりっと表情を変え、リュの目を真っ直ぐに見つめた。

「信じられないかもしれないけれど、俺達、世界中で運命の仲間を探しているんだ。リュさんも、きっと俺達の仲間になるべき人なんだと思う。この携帯電話――って言ってもわかんないか。これに名前が載れば確定なんだけど、絆が高まるまで掲載されないから、俺達にも分からないんだ。でも絶対、俺達が迷宮で出会ったことは偶然じゃない。運命なんだ！」

リュは黙った。

というか、黙らざるを得なかった。

誰か、この気持ち、察してください、と自由な方の手で密かに胸を押さえた。

（ナビよ……お前以上に私に精神的クリティカルヒットを負わせるとは……刹那少年、侮れん……）

リュの沈黙を良い方に解釈したもののか、刹那は胸元を押さえるリュの手のひらの上に自らの手を重ねた。

そのままぎゅっと握りこむ。女性陣の悲鳴が聞こえた。

「戸惑うのも分かるよ。だけど、協力して欲しい。この世界を救うために、運命の仲間達の力が必要なんだ！」

続けて紫桜音が卓につき、勢いよく立ち上がる。

「お願いっ、私もリュさんは、きっと仲間になるべき人なんだと思う。感じるの！ リュさんは何か違うって、きっと星に導かれた仲間の一人だって！」

リュは刹那の肩越しに紫桜音の方を見やり、ゆっくりと溜息を吐いた。

「ごめんなさい。私には何が何だか——世界を救う？ 今は魔界とも緊迫状態にありませんし、一時に比べたら平和なものですよ？」

セクハラとしか思えぬ刹那の手を自然に押し戻す形で下げさせ、リュは困ったような笑みを浮かべた。

紫桜音は「ううん」と首を振る。

「それは見せかけの平和なの。これから起こる崩壊は、とても恐ろしくて、うまく説明することができない。私達はその光景を見せられてここに呼ばれたの」

紫桜音は唇を強く噛んで、青ざめていた。心配そうに白い虎がのっさり首を持ち上げて主の手を舐める。

「……ん、心配かけてごめんね。とにかく、全ての恐ろしい崩壊を止めるために、たくさんの絆で結界を作らなくちゃいけない。それを【星図】と呼んでるの。きっとリュさんも、編むべき星図の一つの星だと思う。だから、お願いします。協力してください」

紫桜音は頭を下げた。

リュは刹那よりも、この少女に対して好感を持った。だが、それ以上に――

（もし、私が何も知らなければ、協力しても良かった。もう少し話はつめただろうけれど、納得すればそれもやぶさかではなかった。多分、私は――）

ここに来て、リュにも見えて来たものがある。

つまり、【何か】は、徹底的にリュと彼らバランスブレイカーの対立を望んでいる。

彼らが動き回れば回るほど、リュの維持すべき予測線は死亡方向へと折れ曲がる。

彼らは崩壊を謡うが、【星図】が完成すればリュは死ぬだろう。

つまり、リュが死なぬように予測線を誘導すれば、【星図】の完成なくしても、世界は崩壊などしない。

（あるいは、崩壊とは、【誰】にのつての崩壊か――）

何もかもが、リュを含む全ての事象が恣意的だ。

そもそも誰の恣意なのか。

誰がリュや刹那や紫桜音を駒のように配置し、自由に泳がせているように見えて、誘導しているのか。

リュ自身が駒の指手たらんとしているだけに、この平面状に配置された意図的な道筋がぼんやりと見えてしまう。

（それはそれとして）

リュは握られっぱなしの両手に視線を落とした。

「あの、手、放していただけますか？」

「え、あ？」

やはり刹那は変な顔をした。彼はあっさりと手を放したが、不思議

議そうに自分の手とリュの手を交互に見ていた。

「あ、と……リュさん、なんともない？」

「なんともとは？」

「いや……そっか。そうなんだ」

勝手に納得し、刹那は自分の頭を気まずそうにかいたが、次の瞬間には白い歯を見せて笑った。

「ちょっと、凄い新鮮かも」

「は？」

「なんでもない、これから、よろしくな」

勝手に決められた。先ほどの会話の流れで、リュは了承したことになったらしい。

（まあ良いか。元々【その予定】だ）

「どちらにせよ、協会への報告は欠かせませんが――皆さん、今後どうされるつもりです？」

「ああ。レインダードシアカに行くつもりだ。あの国では大変な飢饉が起きているって聞いたからな」

「うん！ 私達の力で、少しでも多くの人を救いたい。ちょっと遠回りになっちゃったけれど、スーリアやリュさんが仲間になってくれたから、きっとダンジョンのことも無駄じゃなかったし、バルも優しくなってくれたし、皆必要なことだったんだよね」

紫桜音が眩くと、白い虎が不満そうに喉を鳴らし、尻尾をはたはたと地面に叩き付けた。

「あ、ごめんごめん。白夜のことも忘れてないよ！ 貴方も新しい私達の仲間！」

彼女が細い指先でその喉元をくすぐると、虎はぐるぐると今度は嬉しげに目を細め、甘えるよう頭を擦り付けた。

それから、はっとしたように紫桜音はリュのほうを振り返って、焦ったように両手をわたわたと振る。

「あ、えつとええと、大丈夫だよ！ この間説明したとおり、もう大丈夫だから！」

リュは無反応に彼女達をただ視界におさめる。

「浄化の力で、もう別の生き物になっているの！ 穢れを全部浄化して、新しく生まれ変わったんだよ！ リュさんのこと、二度と襲わないから！！！」

ね、白夜！ と虎の頭を撫で回し、まぶしいほどの笑顔で紫桜音は獣の太い首に両腕を回した。

これは、たとえば話だ。

黒いヒトデのぬいぐるみがある。

そのぬいぐるみを切り裂き解体し、白く染め直して、新たに白い猫に仕立て直したら。

それは果たして元のヒトデのぬいぐるみといえますか？

（そんなこと、許されるはずがない。人が、命を創造する。人が、命を作り変えてしまう——）

指先まで震えが走り、リュは大地がぶよぶよと感覚を失って、直

線が崩れて行くかに思えた。

（あの少女は、悪くない。自衛しただけ。イサークは攻撃した。だから、当然の報いを受けただけ。殺されたって、文句は言えない。でも、理不尽だと、許せないと思うのは、私のエゴでしかない。でも、でも――）

（でも、あれは白夜なんて、変な名前じゃない。彼は、イサークだと、私はそう初めに呼んだのに）

負の感情が、熱い塊となって喉下にせり上がる、そうしたら、虎がつい、とリュを見た。

リュは、はっと胸を突かれる。

虎は牙を剥き、するりと主の少女の腕の中を優しく抜けると、恐るべき跳躍力でリュに飛びかかった。

刹那の驚いた顔が一瞬視界を過ぎる。

だが、すぐ視界いっぱいには獣の巨体がのしかかった。

赤い血のような目には爛々と敵意のみ浮かべ、容赦なくリュの肩に爪を立てる。

大地にたたき付けられるようにして四肢を組み伏せられたまま、リュは荒い息の下で恐ろしい獣を見上げた。

虎ははつきりと威嚇し、腕から血を流しているリュに頓着せず、このまま死んでしまえとばかりに爪でますます腕をえぐる。

呆然とする。

ただひたすらに呆然とする。

明確な敵意が滴るように間断なく落ちて来る。
リュの胸が激しく上下した。

遠くで悲鳴がする。

「白夜、駄目っ、リュさんは仲間なのっ　どきなさい!!」

黒いヒトデのぬいぐるみをずたずたに引き裂いて、白に染め直し、新たに猫の形にリフォームしたら。

それは果たして元のヒトデのぬいぐるみといえますか？

答えはNO.

もうそれは「白い猫のぬいぐるみ」でしかない。

そして、ずたずたに引き裂かれた魂を元に戻すことなんて、神様にだってできやしない。

I'm all yours.

(……いさーく。わたしだよ。りゅだよ。分からないの?)

両腕を差し伸ばして、訴えたい。

だが、腕は動かない。

鋭い爪でえぐられ、大地に縫い止められている。

虎の目はかつての彼の無数の眼と同様、血のように赤く、ただただ敵意で濡れている。

——敵意?

違う。

殺意だ。

リュは、イサークにこんな目を向けられたことはない。

一度だってない。

だから、知らなかった。

こんなに辛いなんて、知らなかった。

こんなに苦しいなんて、知らなかった。

リュはショックを受けていることにショックを受けていた。

もっと冷静に対処できるはずだった。

リュの優先順位はあくまで己の生存である。

そのためには、鉄鋼鑢てっこうやじりのように精神を研ぎ澄まし、時に感情を理性の前に殺すことも厭わない。

だが、そんなのは、ただの机上の空論だ。

(だって、苦しい——)

胸は荒い呼吸に上下し、リュの血の気を失った唇は、惨めに戦慄した。愚かにも、その舌先は、いさゝく、と名を呼びかけた。

だめ、と寸前で呑み込んだのは、息も絶え絶えの理性が必死に手綱を引いたためだ。

腕と肩に爪が食い込むその痛みこそが、リュを正気づかせる。

同時に何よりも打ちひしがれさせた。

目の前の虎とて、特に力を入れているわけではないのだろう。

ただ配慮など一切ないだけだ。

本気になればこんなものではないだろう。力も入れず、引き倒している、それだけでリュの肉をえぐってしまう。

だが、こんな爪よりも、イサークの触手はもっと恐ろしいはずだった。巨大な身体と握力は、リュの紙装甲なぞ、彼がちょっと力を入れるだけで潰れたトマトに変えてしまっただろう。

だけど、彼の太い触手がリュをその内側に巻き込み引きずり込んだとして、彼女はそうされても恐ろしいと思ったことは一度もなかった。

今ならば、よく分かる。

分かっていたつもりで、全然分かっていなかった、そのことが良く分かる。

（イサーク、お前……本当に、本当に……）

本当に、そっと触れていてくれたのだな、とリュは顔面を覆いかけた。

彼は、細心の注意を払って、泣きたくなくなるほどに注意深く、決して傷つけぬようにしてくれた。

イサークは、力のコントロールが本当に苦手だった。

結局、最後まで自分の力をうまく使いこなすことはできなかった。

だが、その繊細さは、リュに触れる繊細さは、果たしてどれほどの苦行であっただろうか。

彼の全神経を集中させて、まるで硝子で出来た葉脈を摘みあげるかのような注意深さだっただろう。

リュは簡単に壊れてしまうから、壊さぬように。

紫桜音が必死に虎を呼ばわり、刹那が引き剥がそうとする寸前、のっそりと巨体がリュの上から遠ざかる。

その尾を見ながら、リュは疼痛を無視して無理矢理上半身を起こした。

半泣きの謝罪、心配して揺さぶられる。

「ごめんなさいっ、浄化したのにつ、こんなはずじゃなかったのに」

あまり揺さぶらないで欲しいとかすれる声で訴え、リュは首を左右に振った。

「いいえ、私が悪いのです。多分、敵意を持ったから、敏感に反応したのでしょう」

正確には、紫桜音に対する敵意に、反応した。

だから、彼女の【浄化】とやらは万全で、何の抜かりもなかったはずだ。

「あ。当たり前だよっ、リュさん、何度も襲われてるから、怖くないわけないよね。私が無神経だったの。白夜、あっち行ってなさいっ」

追い払う仕草に、虎はしぶしぶといった体で、頭を低くし、ぐるり方向を変える。リュにはもはや一切の関心も失せたかの様子で視

線もくれず、真っ白な毛並みは筋肉のうねりに合わせて波打ち、命令どおり木立の奥へと消えた。

「今治すからっ」

少女の手のひらが白く光る。発光したまま押し当てようとした時、リュは咄嗟にその手を押し留めた。

「え!?!」

「ありがとうございます、でも傷は自然治癒に任せます。見た目より大した傷じゃありません」

「で、でも」

「そうだよ、リュさん、やせ我慢してないで、治癒した方がいい!」

今度は刹那が手を押し当てようとするのを、リュは、はっきりと断った。

「治癒魔法は便利ですけど、色々副作用も報告されているから…緊急性がない限りは、自然治癒力に任せようと思います」

もっともらしいことを言ったが、それは理由の一割も占めていない。本音としては、身体を作り変えてしまうような力を持った彼らに、己の体を弄繰り回されたくないかったのである。

「でも、リュさんは女性なんだから、身体に傷でも残ったらよくないだろう!」

「お気遣いとても嬉しいですが、ご親切だけいただきますね」

それより、薬を分けてもらえないだろうか、と続けるところを、スーリアが苛立たしげに遮った。

「ほんっとうに頑迷な人間ね。刹那たちがこんなに心配しているのに、貴女頑固すぎるんじゃない？」

「……です」

同意したのは銀髪オッドアイ少女だ。タマモも腕組みして、愉快そうな顔ではない。

とてとてと小さな竜神の少年が走ってきて、ひっしと紫桜音に抱きつき、リュを睨む。

まずいな、とリュは自分の軽率さに自嘲した。確かにうまいやり方ではなかった。有り体にいって、可愛いげのない反感を買ってしまう言い方だった。頭が回っていない。

彼女は、まずは頭を下げた。

「すみません、不快にさせてしまって……あんまり治癒魔法に頼るなど、一族の家訓なのです。皆さんにご迷惑をかけるつもりはなかったんですが……っ」

頭を下げて謝罪した途端、急に眩暈が襲って、リュは舌打ちしたくなった。

このままでは治癒コースだ。

冗談ではない、とリュは怖気で顔面を歪めそうになる。

「やっぱり……」と刹那が手のひらを押し当てようとした。

その時、ぬ、と大きな影がしゃがみ込む彼らの頭上に落ちた。

「あれ、バルドウィーン、どうしたんだ？」

刹那は驚いたように見上げたが、バルドウィーンの顔は陰しいものがあつた。

「用事を済ませたので、こちらに來たのだが……」

リュは心底助かった、と思った。バルドウィーンと目が合い、全身全霊で願いと謝罪を込め、救助依頼する。

ありがたいことに、彼には空気を讀む力があつたようだ。

「え、おいつ」

咎める刹那を無視して、バルドウィーンはその場にしゃがみ込むと易々とリュを抱き上げた。

「まだ治癒してないし、なんでっ」

「彼女は治癒を望んでいないようだ。手当てするので、部屋に連れて行く」

「それなら俺が」

「刹那、君は力はあるが、リュ殿と身長は似たりよったりだ。私が連れて行くから、心配しなくていい」

何か言おうとした刹那に、リュはあえてバルドウィーンの首に頭を寄せた。刹那が大声を出すたび、耳鳴りがする。そろそろ限界だった。

「っ！」

刹那が信じられぬものを見るよう、愕然とした風情で声を呑み込む。

「すみません、殿下。お手を煩わせますが、お願いできますか？」

バルドウィーンはリュの余裕のなさを察したのか、無言で頷き、踵を返した。

背中に刹那の強い視線を受けながら。

ゆっくりと振動をさせぬよう歩くバルドウィーンに、リュは心底申し訳なく思い、血の気の引いたまま謝罪を口にした。

「申し訳ない、恨みを買わせてしまいましたね」

あの少年は、恐らく拒否された経験は皆無とっていいだろう。リュに執着しているわけではなくとも、プライドを傷つけられたと感じたかもしれない。それが後々どう影響するか。

本当にうまくないやり方だった。だが、結局は同じことか、という冷めた気持ちもリュの中には同時に存在していた。

（彼らを、『この世界は思い通りにならぬ』と忌避させるということとは、つまり——いずれは同じことになる）

いずれ遅いか早いか。ならば早い方がいい。ただし、バルドウィーンの危険は段違いに跳ね上がるだろう。

その意味で、申し訳ないことをした、とリュはいくら頭を下げても足りぬであろうと思った。

バルドウィーンはそのことをも察したようだった。

「何。元々疎まれていたところに、一つ二つ加わったところで大した痛痒も感じない。すでに死んでいた命を、恩人に返したただけだ」

「そこまで恩義に感じてもらおうと心苦しいものがありますね。貴方の命は貴方のものではない。誰も誰かの命に責任も義務も負うことはできないのですよ」

できるのは、その努力をすることだけだ。

あるいは、彼は彼を生かすものに返さねばならない。彼の帰属する国家に。それこそが義務であろう。

バルドウィーンは少し困ったように口ごもり、

「私が好きでしていることだ。貴女にも文句は言わせない……と思う」

語尾が弱かったので、リュは噴出し、たちまち「アイタタタ」と肩の傷口が引きつって小さく丸まった。

バルドウィーンは青ざめ、急ぎ客間にたどり着くと、治療の手配をした。

「ありがとうございます。おかげさまで助かりました」

他の者には隔意があるやもしれず、バルドウィーン手ずからの治療を受けながらリュは礼を言った。

「気にしなくていい。私でも、あれは御免こうむる」

包帯を巻きながら、バルドウィーンはためらう様に尋ねた。

「この傷は……」

「ええ。今は白夜というらしいですが。やられました。主への敵意はよく察知するようですね、見事なものです」

本当に見事だ。見事に彼を作り変えてしまった。もう別の存在なのだと、リュは認めざるを得なかった。

一時的な魅了を永續魅了【溺愛補正】は遥かに凌ぎ、それすらを

も超える存在の再構成再構築【浄化】の力をまざと見せ付けられた。

「辛いだろう」

彼の言葉には、恐らく誰よりも重みがあるはずだった。身内を含めた周囲の異常に取り残され、彼こそが【異常】とされてしまったのであれば、リュの気持ち痛いほどに分かったであろう。

「いいえ、辛くありません……と言うつもりだったのですが……自分でも思った以上にしんどいようです。そのこと自体がショックですね」

まだまだ修行不足だな、とリュは口の端を歪めた。
でも、と同時に思う。

「どんな形でも……生きていてくれたなら……それでいい……」

例えもう別の存在でも。
連続性がなくても。

それはすでに存在の【死】と同義であるとしても。

（……生きてさえいれば……はっ、嘔吐きめ……あれは《死んで》
いるより酷い、《生きて》などおらぬ……！！！！）

ぎりぎりとなややかな手のひらの内側に爪を立て、リュは平淡な表情を取り繕い続けた。

二人はしばらく事の守備や今後のことなどいくつか打ち合わせし、「再度逆戻りだが、養生した方がよいだろう」というバルドウィーの言葉に甘え、リュは彼が出て行くと横になった。

今回のことは吉でもあり、凶でもある。

危険を理由に、行動の自由は得やすくなるだろう。

リュは先ほど話し合った内容を反芻しながら、考えを巡らせていたが、結局ある思考からは逃れられなかった。

熱が上がってきたのか、冷たいシーツに頬を摺りつけ、リュは焼けるような息を吐いた。

そして、泣き声のようなうめきとともに、とうとう口にすまいとしていたそれを漏らしてしまった。

「……い……さあ、く……っ」

喉が痛い。目が熱い。

（すまなかった）

リュは身体を折り曲げ、ぎゅっと目を瞑った。

（本当に、すまなかった）

泣くな、と愚かさを分かっているのに、人であろうとする部分はそれを止めることができなかった。

（痛かっただろう。苦しかっただろう……何度も何度も！ 何度も切り裂かれ、すり潰されたのか。何度も立ち向かったのか、愚か者！！ どうして、いや、私が……馬鹿な子！ ……逃げればよかった！ 一時撤退すればよかった！！ 私は土を食^はんだところでなんとも思いはせぬ！ どうして……どうして苦しめる、イサーク！！）

命ばかりか、心も身体も魂すらも！ 奪われ尽くして再構成されるなど……！ そんなものは、もはや元の己であるとはいえぬ！

文字通り、生まれ変わって別の存在になったに等しい。

（死よりも酷い……もうそれすらも分からないのか……馬鹿な子。逃げてくれれば……《生きて》さえいれば、再起をはかることもできたものを……《生きて》さえいれば……）

こんなことになるなんて、思いもしなかった。

（こんなことになるなら、）

肩口を強く抱きしめる。

血が滲む。それでもリュは爪を立てる。

（こんなことになると分かっていたら、気づかないふりなど……しなければよかった……）

血を吐くようにして、リュは認めた。

知っていたのだ、リュは。

イサークが、どんな目で、自分を見ていたか。

彼が葛藤し、苦しんでいたのも知っていた。

自らの姿を恥じ、力を必死に抑えようとしていたのも知っていた。
自分^{リュ}をどうしたいかも、その欲望がどういう種類のものなのかも、
大体は察していた。

だが、口にしたところでどうなっただろう。

彼の全力の欲望を受け止めることなど、できるはずもなかった。

リュは、死にたくない、その一心でこれまでの生をつないできたのだ。

何故自らそれを脅かすことができる。

まして、自分自身の魔としての本性とは、相容れぬと向き合うこともできずに目を反らし続けている。

彼女にできる最良とは、知らないふりをし続けること。

それがお互いのためだと思った。

他に選択肢などあったのだろうか。

でも。

もし。

もし、イサークが。

彼が、はっきりと、欲しいと口にしていたら。

リュは拒めなかっただろう。

あんな風に触れて、あんな風に見られて、あんな風に大切にされて。

「――ッ」

彼は恥じていた。

彼は恥じていた。

彼は心底恥じていた。

だが、恥じるべきはリュだった。

卑怯なのはリュだった。

知らぬふりをしたのはリュだった！

（信じればよかったのか。蹂躪を許せばよかったのか。だが、彼ですら彼自身を信じていなかったのに、どうすれば良かった。あれに責任を全部負わせればよかったのか！？ 誰も誰かの命など背負えない。背負わせたくない！ 私の命を捧げて、あれを苦しめればよかったのか。そうじゃないと思ったから、だから！ でも何が正解で何が最善だというの、そんなの分かりはしない！ これが最善の選択の結果だというなら！ 全部嘘でまやかした！ こんなことならっ、こんなことなら！！）

その先は口にははいけないし、考えてもいけない。

でなければ、折れてしまう。

リュは淫魔だった。

生前の彼女の道徳観において、恥じるべき淫魔だった。

リュこそが、欲していた。

彼女こそが、強く抱きしめて欲しいと訴えたかった。

遠慮がちに触れる指先に、もどかしさで何度も呑み込んだ。

ぐちゃぐちゃにされてもよかった。

全部彼のものになってもよかった。

そうされたかった。

ただ彼女は、拒絶し、隠して、蓋をしたのだ。

（こんなもの——愛であるわけがないっ、ただの欲望だ——！！）

しかも、その果てに破滅しかない。

欲望に振り回されているのは、イサークだけではない。

本質から逃れられぬのも。

リュもまた、それ以上に引きずられ、そうなるまいと全てを抑圧した。

歪む音にも耳を塞いだ。

そんなものでイサークの今後をめちゃくちゃにしてしまうくらいなら、とそう思ったこと自体が欺瞞だったのか。

だが、あまりにもイサークの思考は【ヒト】に似過ぎていた。一時の充足と引き換えに、その後の地獄を彼の幼い精神が耐えられるとは到底信じ難かった。

まして、リュは死にたくなかったのだ。

他の淫魔のように奔放に生きられない。

他の魔族のように奔放に生きられない。

死と引き換えの色と戦いの快楽に諸手を上げて賛同などできない！ただ何事もなく、一日一日を平和に暮らしたいだけだ。

そこに彼も、他の皆もいて、日々を維持したかった。

その為に、目も耳も塞いで、知らぬふりをした。

それすらも許されないというのか。

それを自らに許してはいけなかったのか。

もし本質に身を委ね、後先考えずに行動していれば、この結末は回避できたのだろうか。

こんな苦しい後悔という名の未練は回避できたのだろうか。
そうリュは答えのない問いに、自問自答を繰り返し続けた。
朝日が昇れば、再び蓋をする。もう覗いて見たりはしない。
誰にも言わない。

恐らく今夜見る夢は悪夢以外なものもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7136y/>

死亡フラグ回避の華麗な方法～物語の裏で蠢く皇女様血涙編～

2012年1月1日22時52分発行